

令和6年度「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」に関する 成果報告書

- 1 委託事業の内容
「専門学校と高等学校の有機的連携プログラムの開発・実証」
- 2 事業名
「福祉・介護分野における中核的人材養成に向けた高専一貫教育プログラム開発・実証事業」
- 3 分野
福祉【介護人材】
- 4 代表機関

法人名	北海道栗山町
代表者名	栗山町長 佐々木 学
学校名	栗山町立北海道介護福祉学校
所在地	北海道夕張郡栗山町字湯地60番地

北海道栗山町

はじめに

少子高齢社会の進展により、今後も高齢者人口のピークが続くとともに、人口減少が加速化すること見込まれている。介護人材の確保はますます困難となることが予想され、介護福祉士はもとより介護福祉士以外の介護職、さらには多様な担い手や手法で、地域住民が主体となって地域共生社会を構築する必要がある。

本町では早くから高齢社会の到来を見据え、介護の必要性を認識し、昭和62年の社会福祉士及び介護福祉法に基づく国家資格「介護福祉士」創設を契機に公立の介護福祉士養成校として北海道介護福祉学校を昭和63年に開校し、福祉のまちづくりを掲げてその充実・深化に努めてきた。

本校が掲げる教育目標に基づき、豊かな人間性や、日々進化する高度な知識・技術に対応できる人材の育成に尽力しており、これまで30年余に渡り2千2百人以上の卒業生を輩出し、道内各地の介護人材育成に寄与している。

既に本町では介護人材確保に向けた対策を協議する場として、行政（町及び教育委員会）、介護福祉学校、産業界（町内介護事業所等）が連携し、「栗山町介護人材確保連絡会議」等を設置し、課題解決に向けた議論を深めている。

これらを踏まえ、本校の存在意義を発揮し、介護分野においてその中核を担う介護福祉人材を養成するため、新たな教育モデルの開発を目指したいと考え、現在、連携協定を締結している栗山高等学校との連携をより強化・発展させるとともに、行政と産業界が協働し、高・専一貫の教育プログラムの開発に必要な体制として、連携組織

「魅力化コンソーシアム（図1）」を構築し、発展的な事業展開を行うとともに、専門学校と高等学校の有機的連携プログラムの開発及び実証を目指すものとして、令和4年10月3日に本事業にかかる委託契約を締結している。

なお、参画主体・参画レベルは、各分野・地域から人的・物的協力などを得ることでプログラムの実効性や事業の効率性を高め、社会に求められる人材ニーズに基づいた教育プログラムを開発し、産業界とも連携を図り、介護人材確保に資するものとしている。なお、本事業は令和4年度から受託しており、令和5年度から実証授業を本格的に実施し、継続して令和6年度も実施した。なお、令和4年度および令和5年度の詳細内容に関しては、以前の実績報告書を参照されたい。

1 本町の福祉教育

本町はこれまで「福祉のまちづくり」を掲げてきた。現在、第7次総合計画が策定されているが、まちづくりの合言葉は「ふるさとは栗山です。～みんなが元気なまち～」として、人がるながら元気あふれる人生100年を目指している。

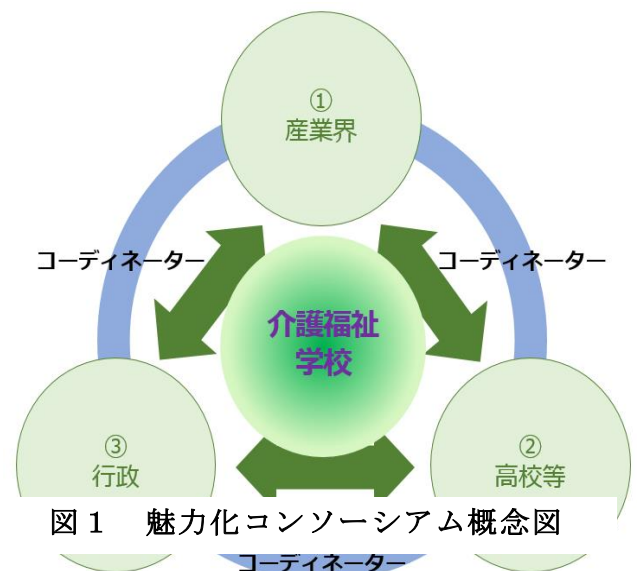


図1 魅力化コンソーシアム概念図

本校はこれまでの間、特徴的な取組として、北海道介護福祉学校の専任教員が町内小中高の児童生徒に対して行う「福祉」の学習指導や介護福祉学校の在校生が中心となり町内の小中学校及び北海道栗山高等学校と連携し、義務教育（小学校）における総合学習、土曜授業、また中学生の上級学校訪問等に対応してきた。

栗山高等学校とこれまでの連携協定に基づき、発展的に事業展開を図ることが求められることから選択科目「生活と福祉」への教員派遣と、新たに令和5年度から栗山高校の必修科目となった「栗山と福祉」のカリキュラム作成、授業実施等を実施してきた。なお、「栗山と福祉」の科目が栗山高校において3年間継続の必修科目となったことから、これまでの連携協定に基づくプログラムの課題であった高校2年間の空白、3年生選択科目履修生のための接点づくりしかできないという課題が解消されることになった。このことにより、小中高等学校の12年間を「一つの学び」として捉えること、さらに本校への進学を選択した場合においては計14年間、それぞれの発達・成長段階にあわせて系統的に学ぶことができるスキームが出来上がった。そこに生涯学習の視点から地域住民をも巻き込んだ体系（図2参照）が明確になった。

一方、専門教育を受ける介護学生にとっては将来を見据えての「半学半教（造語：学んでいる立場でありながら、教える立場にもなる）」が可能となる。また、小中高等学校の12年間を「一つの学び」として捉えた場合、介護学生が次世代のロールモデルにもなり得ることになる。

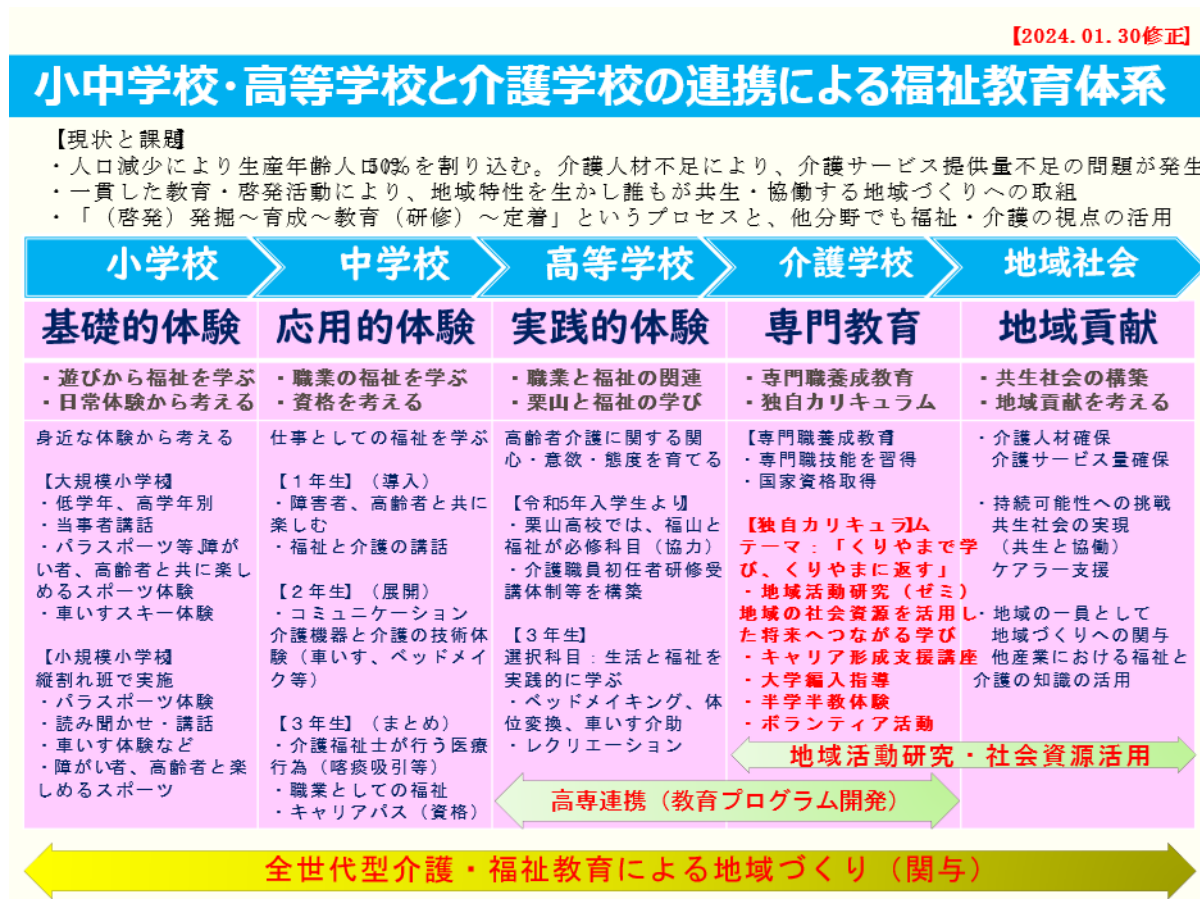


図2 本町における福祉教育体系のイメージ

今後、これらのイメージ図をもとに、栗山に住むすべての子どもたちが地域の人々との触れ合いや体験活動を通して、「支える・支えられる」「教える・教えられる」という対極の関係ではなく、地域に生きて暮らしている以上、互いを思いやり、助け合い、励まし合いながら、自分たちの住むこの栗山を誇りに感じ、自らがこのまちの担い手としての自覚を持つための教育（人権、権利、尊厳なども含む）、地域共生社会の実践を進めていく必要がある。

これらに加え、今後も少子高齢化と生産年齢層の減少といった人口構造が変化する社会において、地域の持続可能性という課題を視野に入れた「福祉・介護の知識を有する人材」を養成すること、「支える人を支える」地域づくりには意義があること、また高校生等がどのような進路選択をしたとしても「生活する、生きる、地域とつながる」という「福祉と介護の視点」はどのような時代においても必要な視点であることから、本事業の3年目の取り組みになったものである。

2 令和6年度の取り組み

（1）教育プログラムの策定概要

①栗山高校のスクールポリシー

高専連携プログラムを開発するにあたり、令和5年度入学生より「栗山町の自然や暮らし、介護・福祉に興味関心があり、地域の課題解決に主体的に取り組む生徒」と一部スクールポリシーが変更になって2年目を迎えている。

②栗山高校における学校設定科目「栗山と福祉」の展開

令和5年度入学生より総合科目「栗山と福祉」が新設となり、必修科目として生徒全員が3年間で計105時間学習することになった。令和4年度に検討・作成したカリキュラムに基づき、令和5年度は1学年に対して実証授業したが、その結果もとに修正して令和6年度のプログラムを展開した。2学年に関しては、令和4年度に計画した内容と、1学年で実施した内容を精査し、プログラムの修正を図った。

さらに3学年のプログラムは、令和4年度に作成した内容をもとに、令和5年度および6年度の実証授業をもとに、令和7年度分と令和8年度分のプログラムを作成した（実証は令和7年度以降に実施することになる）。

③「栗山と福祉」のカリキュラム作成（開発したプログラム）

令和4年度に栗山高校と北海道介護福祉学校間で協議を行い作成した「栗山と福祉」の学年別テーマ（表1参照 「栗山と福祉」の学年別テーマ）を基にした。

1年次カリキュラム（表2参照 「栗山と福祉」（1年） 令和5年度修正）に基づき授業を展開した。展開する中でも若干の修正と追加を加えて実施した。

表1 「栗山と福祉」の学年別テーマ

栗山高等学校 総合科目「栗山と福祉」の学習テーマ

【1年次の学習内容】

栗山町の高齢化の現状と福祉の歴史を学び、課題を発見する。また、さまざまな活動を通して介護や福祉についての興味・関心を養う。

【2年次の学習内容】

介護の基礎的な技術を学びながら、職業としての介護や福祉についての理解を深める。

【3年次の学習内容】

地域社会の一員として、自らにできることを考え、実践する力を身につける。

表2 「栗山と福祉」1年 カリキュラム 令和5年度作成

【学習テーマ】			
栗山町の高齢化の現状と福祉の歴史を学び、課題を発見する。また、様々な活動を通して介護や福祉についての興味・関心を養う。			
回	月	学習内容	講師・会場等
1	4	オリエンテーション（3年間の流れ）・ポートフォリオ配付	
2・3	4	映画で学ぶ福祉（映画鑑賞）	こんな夜更けにバナナかよ
4	5	出張講義：くりやまの福祉の歴史と今	介護福祉学校
5	5	くりやまの福祉サービス	
6	7	手話講座（手話ソング）	
7	7	手話講座（手話ソング）	
8 9	9	実習）介護福祉学校での介護実習（車いす介助・歩行介助）	介護福祉学校
10-13	9	合同演習：車いすで街に出てみよう（介護福祉学校学生と合同授業）	介護福祉学校 栗山公園
14・15	9	車いすで町に出てみよう・まとめ	
16	10	出張講義：高齢者とのコミュニケーション	介護福祉学校
17 18	10	施設見学：特養くりのさと 学校見学：介護福祉学校	特養くりのさと 介護福祉学校
19 20	11	実習）介護福祉学校で介護実習（視覚障害者体験）	介護福祉学校
21・22	11	講演 盲導犬協会	
23・24	11	合同授業 パラスポーツ体験	介護福祉学校
25-30	11	見学）福祉系大学訪問・模擬授業体験	
31	11	事後指導 盲導犬、パラスポ、介護実習等）	
32・33	12	合同授業 パラスポーツ体験	介護福祉学校
34・35	2	合同授業 福祉・介護のICT化を知る 介護機器・ロボット体験	介護福祉学校

・今後、関係機関等と調整する中で変更する場合がある。
・介護学生と栗山高校生の合同授業を調整

これらの授業を展開すると同時に高校、専門学校双方の学校行事等及びより精度の高いものとするために随時、担当者間で協議を行い、1年次カリキュラムの修正しながら実証授業（表3参照 「栗山と福祉」（1年） 令和6年度実績）を実施した。

表3 「栗山と福祉」1年 カリキュラム 令和6年度実績

【学習テーマ】			
栗山町の高齢化の現状と福祉の歴史を学び、課題を発見する。また、様々な活動を通して介護や福祉についての興味・関心を養う。			
回	月	学習内容	講師・会場等
1	4	オリエンテーション（3年間の流れ）・ポートフォリオ配付	
2・3	4	映画で学ぶ福祉（映画鑑賞）	こんな夜更けにバナナかよ
4	5	出張講義：くりやまの福祉の歴史と今	介護福祉学校
5	5	くりやまの福祉サービス	
6	7	手話講座（手話ソング）	
7	7	手話講座（手話ソング）	
8 9	9	実習）介護福祉学校での介護実習（車いす介助・歩行介助）	介護福祉学校
10-13	9	合同演習：車いすで街に出てみよう（介護福祉学校学生と合同授業）	介護福祉学校 栗山公園
14・15	9	車いすで町に出てみよう・まとめ	
16	10	出張講義：高齢者とのコミュニケーション	介護福祉学校
17・18	10	施設見学：特養くりのさと 学校見学：介護福祉学校	特養くりのさと 介護福祉学校
19・20	10	実習）介護福祉学校で介護実習（視覚障害者体験）	介護福祉学校
21・22	11	中途障害、パラスポーツ	
23～28	11	見学）福祉系大学訪問・模擬授業体験	
29・30	12	合同授業：パラスポーツ体験	介護福祉学校
31・32	12	講演 盲導犬協会	
33	12	事後指導 盲導犬、パラスポ、介護実習等）	
34・35	2	合同授業 福祉・介護のICT化を知る 介護機器・ロボット体験	介護福祉学校
36・37	2	発表：車椅子体験・栗山公園のバリアフリー	追加

※介護学校教職員、高等学校教員は随時授業に参加。計5回の来校授業。
 ※高校生と介護学生の合同授業も実施。うち21回及び22回は地域公開（住民参加）

なお実証授業は講義形式、演習形式、出前授業、合同授業（高校生・専門学校生の合同による授業）の形態で介護福祉学校教職員、高等学校教員は随時授業に参加している。高校生が専門学校の機能・設備を利用する形で受講した授業（来校授業）は計5回となった。また、高校生と介護学生の合同授業を4回実施した。そのうち1回は地域住民参加型の地域公開として実施することができた。

表4 「栗山と福祉」2年カリキュラム 令和5年度作成

【学習テーマ】			
介護の基礎的な技術を学びながら、職業としての介護や福祉についての理解を深める。			
回	月	学習内容	講師・会場等
1	4	オリエンテーション（2年次の学習について）	
2・3	4	映画で学ぶ福祉（映画鑑賞）	
4・5	5	実習：介護実習（高齢者疑似体験）	介護福祉学校
6・7	5	実習：介護実習（ベッドメイキング）	介護福祉学校
8・9	5	実習：介護実習（体位変換）	介護福祉学校
10・11	5	実習：介護実習（衣服着脱・食事等）	介護福祉学校
12	5	介護実習振り返り	
13・14	6	手話講座	栗山手話の会
15・16	8	合同授業：認知症 VR 体験講座	介護福祉学校
17・18	8	出張講義：認知症サポーター養成講座	介護福祉学校 地域包括支援センター
19	9	出張講義：コミュニケーション方法を学ぶ	介護福祉学校
20・21	9	実習：高齢者インタビュー	介護福祉学校
22-24	10	合同実習：徘徊模擬訓練（地域住民参加型）	介護福祉学校
25	10	出張講義：ヤングケアラーについて考える	地域包括支援センター
26・27	11	合同授業：パラスポーツ体験	介護福祉学校
28	12	出張講義：福祉・介護の仕事を知る	介護福祉学校
29・30	12	合同授業：若手介護職員と学生のトークイベント	介護福祉学校
31・32	2	合同授業：地域活動研究報告会参加	介護福祉学校
33・34	2	合同授業：キャリア形成支援講座参加	介護福祉学校
35	3	講義：2年次の活動を振り返る	

※介護学校教職員、高等学校教員は随時授業に参加。計7回の来校授業。

※高校生と介護学生の合同授業は6回。

※合同授業のうち3回は地域公開として、住民参加による啓発活動として実施する。

これらの授業を展開すると同時に高校、専門学校双方の学校行事等への配慮及びより精度の高いものとするために随時、担当者間で協議を行い、1年次カリキュラムの内容と連動させるよう修正しながら実証授業（表5参照 「栗山と福祉」（2年） 令和6年度実績）を実施した。

表5 「栗山と福祉」2年カリキュラム 令和6年度実績

【学習テーマ】			
介護の基礎的な技術を学びながら、職業としての介護や福祉についての理解を深める。			
回	月	学習内容	講師・会場等
1	4	オリエンテーション（2年次の学習について）	
2・3	4	映画で学ぶ福祉（映画鑑賞）	
4・5	5	実習：介護実習（高齢者疑似体験）	介護福祉学校
6・7	5	実習：介護実習（ベッドメイキング）	介護福祉学校
8・9	5	実習：介護実習（体位変換）	介護福祉学校
10・11	5	実習：介護実習（衣服着脱・食事等）	介護福祉学校
12	5	介護実習振り返り	
13・14	8	合同授業：認知症 VR 体験講座	介護福祉学校
15・16	8	出張講義：認知症サポーター養成講座	介護福祉学校 地域包括支援センター
17	9	出張講義：コミュニケーション方法を学ぶ	介護福祉学校
18・19	10	実習：高齢者インタビュー	介護福祉学校
20・21	10	合同実習：徘徊模擬訓練（地域住民参加型）	介護福祉学校
22	10	認知症：まとめ	
23	10	出張講義：ヤングケアラーについて考える	地域包括支援センター
24・25	11	合同授業：パラスポーツ体験	介護福祉学校
26・27	11	手話講座	栗山手話の会
28	11	発達障害について	介護福祉学校
29・30	12	発達障害について：ワークショップ、当事者より	介護福祉学校
31・32	2	合同授業：地域活動研究報告会参加	介護福祉学校
33・34	2	合同授業：キャリア形成支援講座参加	介護福祉学校
35	3	講義：2年次の活動を振り返る	

※介護学校教職員、高等学校教員は随時授業に参加。計9回の来校授業。

※高校生と介護学生の合同授業は6回。

※合同授業のうち3回は地域公開として、住民参加による啓発活動として実施する。

これらの実証授業を踏まえて修正版1年次カリキュラム（表6参照）、および修正版2年次カリキュラム（表7参照）を作成した。

修正版の1年次カリキュラム及び2年次カリキュラム双方に関して、令和5年度及び令和6年度の実績を基に、また、修正版2年次カリキュラムは高校側と何度となく協議した結果縦系列、つまり高校内上級生から下級生への伝達など、つながりと展開を生徒にも意識させる方向にしたいとの話があった。一方、①他科目との連動があること、②学校行事としても取り組める内容のものがあったことからそれらを精査し、より効率的な展開を目的に次のようなカリキュラムとした。

表6 「栗山と福祉」1年カリキュラム（令和6年修正版、令和7年度実証予定）

【学習テーマ】

栗山町の高齢化の現状と福祉の歴史を学び、課題を発見する。また、様々な活動を通して介護や福祉についての興味・関心を養う。

回	月	学習内容	講師・会場等
1		オリエンテーション（3年間の流れ） ポートフォリオ配付・動機付け	高校教員 介護福祉学校教員
2・3		映画で学ぶ福祉（映画鑑賞）	
4		出張講義：くりやまの福祉の歴史と今	介護福祉学校
5		くりやまの福祉サービス	
6・7		【介護技術を学ぶⅠ】 ①介護技術に関する動機付け ②車椅子と歩行の介助	介護福祉学校
8～11		合同演習：車いすで街に出てみよう	介護福祉学校ほか
12・13		車いすで町に出てみよう・まとめ	
14・15		手話講座（手話ソング）	
16・19		見学：福祉系大学訪問・模擬授業体験	
20・21		車椅子再発見プロジェクト 理学療法士の活動	介護福祉学校
22～23		合同授業：パラスポーツ体験	介護福祉学校
24		合同授業：福祉・介護のICT化を知る	介護福祉学校
25		ICT化と介護ロボット	介護福祉学校
26・27		講演 盲導犬協会 視覚障害体験を含む	
28		事後指導：ICT化、盲導犬	
29・30		自治体の福祉計画	介護福祉学校
31		車椅子ユーザーの視点を活かしたまちづくり	介護福祉学校
32・33		福祉現場の介護職員の話	介護福祉学校
34・35		栗山と福祉1年次のまとめ	

※介護学校教職員、高等学校教員は随時授業に参加。計7回の来校授業を予定。

※高校生と介護学生の合同授業は4回。

※合同授業のうち1回は地域公開として、住民参加による啓発活動として実施する。

表7 「栗山と福祉」2年カリキュラム（令和6年修正版、令和7年度実証予定）

【学習テーマ】			
介護の基礎的な技術を学びながら、職業としての介護や福祉についての理解を深める。			
回	月	学習内容	講師・会場等
1		オリエンテーション	高校教員 介護福祉学校教員
2		高齢者・障がい者の理解（動機付け）	介護福祉学校
3・4		映画で学ぶ福祉（映画鑑賞）	あんを予定
5・6		ハンセン病の歴史を学ぶ	介護福祉学校
7・8		介護技術を学ぶ：①高齢者疑似体験	介護福祉学校
9		事後学習：介護技術・疑似体験まとめ	
10		認知症の理解（動機付け）	介護福祉学校
11・12		認知症サポーター養成講座	介護福祉学校
13・14		認知症 VR 体験	介護福祉学校
15		コミュニケーション方法	
16・17		徘徊模擬訓練	介護福祉学校
18・19		高齢者施設見学：どんな職種の人がいるのか	
20		事後指導：認知症のまとめ	
21・22		手話を学ぶ：手話で会話をしてみよう	栗山手話の会
23		講演 車椅子製作者の話	介護福祉学校
24		防災（BCP）の講話・体験	介護福祉学校
25・26		バリアフリー住宅等の見学	
27・28		発達障害について：当事者の話を聴いてみよう	介護福祉学校
29・30		講談で学ぶ成年後見制度	介護福祉学校
31・32		地域活動研究報告会	介護福祉学校
33・34		キャリア形成支援講座	介護福祉学校
35		栗山と福祉2年次のまとめ	

※介護学校教職員、高等学校教員は随時授業に参加。計10回の来校授業を予定。

※高校生と介護学生の合同授業は9回。

※合同授業のうち5回を地域公開として、住民参加による啓発活動として実施する。

※徘徊模擬訓練に関しては、地域住民の協力を得て実施する。

これらに連動するよう3年次のカリキュラム（表9 令和7年度用「栗山と福祉」3年カリキュラム（修正版）及び表10 令和8年度用「栗山と福祉」3年カリキュラム）も作成した。

「栗山と福祉」は令和5年度入学生からの必修科目であることから、令和4年入学生（3年生）は、これまで同様に3年時に選択科目「生活と福祉」で福祉について学んだ。令和5年度入学生（令和6年度時点での2年生）は、選択科目の「生活と福祉」が高校3年次に開講されないことから、その内容のうち介護技術を2年次

で学習するように盛り込んでいた。しかし、令和6年度の実績結果から、他科目との連動が可能な部分があること、一部は学校行事等を含めて対応できるようになったため、3年生での「栗山と福祉」の内容が令和7年度と、令和8年度で違いが生じてしまうことになった。ただし、令和8年度開始分からは、1学年から3学年を通した内容設定で対応できるようになる。

そのほかある程度、カテゴリーごとに分類したことと、知識・理解の幅を広げるために関連する内容も盛り込むようにしている。そのうち、認知症理解に関しては、認知症に関する理解、認知症のVR体験講座、認知症サポーター養成講座、地域での徘徊模擬訓練と連動する形で地域住民を巻き込むよう体系化している。3学年では、2学年で受講した認知症サポーター養成講座のステップアップ講座を盛り込み、学年間での連動性を持たせるようにしている。

加えて、2学年の後半からの内容は、福祉・介護のキャリア形成をイメージするために、福祉・介護の仕事を知る、若手介護職員と介護学生のトークイベント、また、本校の独自科目である地域活動研究（ゼミ形式による地域でのフィールドワーク）報告会、さらには介護職からのキャリアデザインを知る講座へと連動させるようなカリキュラムとしている。

表8 「栗山と福祉」3年カリキュラム 令和5年度作成

【学習テーマ】			
地域社会の一員として、自らにできることを考え、実践する力を身につける。			
回	月	学習内容	講師・会場等
1	4	オリエンテーション（3年次の学習について）	
2・3	5	手話講座	栗山手話の会
4-8	9	町内高齢者へのプレゼント制作	
9・10	10	レクリエーションを学ぶ ・レクリエーションに関する講義、演習	介護福祉
11・12	10	レクリエーションを企画する	
13-15	10	認知症サポーターステップアップ講座	介護福祉学校 地域包括支援センター
16-18	11	レクリエーション準備	
19・20	12	演習：町内会との交流会	中里町内会 社会福祉協議会
21・22	12	演習：町内高齢者等へのプレゼント配布 ・地域での活動報告、まとめ	社会福祉協議会
23-26	12	「栗山と福祉」発表準備	介護福祉学校
27-30	1	「栗山と福祉」発表	

・今後、関係機関等と調整する中で変更する場合がある。
・外部との調整に関しては、随時実施する。

表9 「栗山と福祉」3年 令和7年度版（令和6年度作成）

【学習テーマ】			
地域社会の一員として、自らにできることを考え、実践する力を身につける。			
回	月	学習内容	講師・会場等
1		オリエンテーション（3年次の学習について）	
2～6		町内高齢者へのプレゼント制作	
7～8		レクリエーションを学ぶ ・レクリエーションに関する講義、演習	介護福祉学校
9・10		レクリエーションを企画する	
11・12		手話を学ぶ	栗山手話の会
13～14		認知症サポーターステップアップ講座	介護福祉学校 地域包括支援センター
15		認知症サポーターのまとめ	
16～18		レクリエーション準備	
19・20		介護の現状など（アラカルト）	介護福祉学校
21・22		演習：町内会との交流会	中里町内会 社会福祉協議会
21・22		演習：町内高齢者等へのプレゼント配布	社会福祉協議会
23～26		「栗山と福祉」まとめ・発表準備	
27・28		特別講義（アラカルト）	介護福祉学校
29・30		「栗山と福祉」発表	

・今後、関係機関等と調整する中で変更する場合がある。
・外部との調整に関しては、随時実施する。

表 10 「栗山と福祉」 3 年 令和 8 年度版（令和 6 年度作成）

【学習テーマ】			
地域社会の一員として、自らにできることを考え、実践する力を身につける。			
回	月	学習内容	講師・会場等
1		オリエンテーション（3 年次の学習について）	
2～6		町内高齢者へのプレゼント制作	
7～8		手話を学ぶ	栗山手話の会
9・10		レクリエーションとは何か	介護福祉学校
11・12		レクリエーション企画	
13・14		レクリエーション準備	
15・16		介護技術：着脱衣・食事等	介護福祉学校
17・18		介護技術：ベッドメイキング	介護福祉学校
19・20		介護技術：体位変換	介護福祉学校
21		介護の現状など（アラカルト）	介護福祉学校
22		ヤングケアラー問題	介護福祉学校
23・24		認知症サポーターステップアップ講座	介護福祉学校
25		事後学習：認知症まとめ	
26		「栗山と福祉」まとめ・発表準備	
27・28		「栗山と福祉」発表	
29・30		「栗山と福祉」報告書作成	

・今後、関係機関等と調整する中で変更する場合がある。

・外部との調整に関しては、随時実施する。

なお、選択科目「生活と福祉」（表 11 選択科目「生活と福祉」）は令和 6 年度末で終了することから、これらの内容については「栗山と福祉」カリキュラムに網羅し、実際に地域の町内会との交流なども行いながら、演習する内容へと修正している。

3 年の「栗山と福祉」に関しては、これまで 2 年間取り組んだ内容と実績を踏まえて令和 7 年度版、令和 8 年度版を作成しているが、前述のとおり令和 8 年度で 1 学年から 3 学年の一貫した形となる。ただし、実証授業自体が令和 7 年度からの取り組みであるため、机上で作成したものには過ぎない。また、高校側の他科目連動で他教科に吸収できる部分もあるが、実際に令和 7 年度を実施することで、令和 8 年度の内容を精査できるようになる。特に、選択科目であった「生活と福祉」の内容を吸収しているが、今後は「栗山と福祉」で全生徒の必修科目になるため、レクリエーション、プレゼント作成等にどれだけの時間が必要になるのかも、令和 7 年度には検証しなければならないところがある。

なお、他の学校等への水平展開を考えれば、栗山高校との関係の中では「生活と福祉」は終了するが、これまで取り組んできた内容は、開発したプログラムとして他校でも活用することができることになっている。

④選択科目「生活と福祉」の内容策定（開発したプログラム）

令和5年度入学生から新科目「栗山と福祉」が必修科目とり、移行期間中（令和6年度末）までは、選択科目「生活と福祉」を継続実施してきた。これについても高校側と介護学校の担当教員間で調整している。そのうち連携して実施するものとして授業を4回計画し、そのうち3回を介護学校への来校型とし、1回は高校で実施することにした。その計画と実績は次のとおり（表11）。

表11 選択科目「生活と福祉」（3年時選択）

年間予定			
回	予定月	学習内容	講師・会場等
1	6月	介護実技：ベッドメイキング	講師 介護学校 場所 介護学校
2	6月	介護実技：ベッドでの体位変換と車いすへの移乗	講師 介護学校 場所 介護学校
3	6月	介護実技：車いす体験と杖での歩行介助	講師 介護学校 場所 介護学校
4	10月	レクリエーションの基礎的・基本的知識の習得	講師 介護学校 場所 栗山高校

・実施時期に関してはほぼ確定。

令和7年度から選択科目は「フードデザイン」となる。これは食生活を総合的にデザインすることが目標であり、介護福祉士養成教育科目の一つである「生活支援技術」と関連づける可能性の検討は現段階において結論に達していない。

教科間連携の模索については一部、横断・総合的で深化する学びの内容・機会の提供について調整したが、実証授業を繰り返すことで今後も検討を加える余地を残しているといえる。

（3）令和6年度の実証授業

①「栗山と福祉」1学年

「栗山と福祉」1年次の実証授業として履修生徒49名に対して延べ13回（実回数11回）の実証授業を行った。その経過については次のとおり。

- ・令和6年5月15日（水）出張講義 「栗山の福祉の歴史と今」
- ・令和6年9月11日（木）来校授業 「車椅子介助・歩行介助」
- ・令和6年9月19日（木）合同授業・学外実習「車椅子で町にでてみよう」
- ・令和6年10月3日（木）出張講義 「高齢者とコミュニケーション」
- ・令和6年10月10日（水）来校授業「介護福祉学校設備見学」（1組）
「特養ホーム見学」（2組）
- ・令和6年10月11日（木）「特養ホーム見学」（1組）

来校授業「介護福祉学校設備見学」（２組）

- ・令和６年１０月３１日（木） 来校授業「視覚障害者体験」
- ・令和６年１１月８日（金） 合同授業「パラスポーツ体験：車椅子ラグビー」
- ・令和６年１１月１４日（木） 福祉系大学訪問
- ・令和６年１２月５日（木） 合同授業・出張講義「パラスポーツ体験：視覚障害」
- ・令和７年２月５日（水） 合同授業・来校授業 「福祉・介護の ICT 化を知る」

※介護学校教職員、高等学校教員は随時授業に参加

※計５回の来校授業。合同授業は４回。

※６年１１月８日は地域公開講座としても実施した。

これらに関して、介護学校教職員及び高等学校教員は随時授業に参加するというスタイルにして実施した。そのうち特筆すべきは１１月１０日のパラスポーツ体験を地域住民参加型の公開講座として、栗山町役場福祉課の協力を得て実施したものである。ここには、地域住民はもちろんのこと、町内の中学校教員等の参加もみられた。

②「栗山と福祉」２学年

「栗山と福祉」２年次の実証授業として履修生徒４８名に対して延べ１６回（実回数１５回）の実証授業を行った。その経過については次のとおり。

- ・令和６年５月９日（水） 来校授業「介護実習（高齢者疑似体験）」
- ・令和６年５月１０日（木） 来校授業「介護実習（ベッドメイキング）」
- ・令和６年５月１３日（月） 来校授業「介護実習（体位変換）」
- ・令和６年５月１４日（火） 来校授業「介護実習（着脱衣・食事等）」
- ・令和６年８月２７日（火） 合同授業・体験 「認知症 VR 体験」
- ・令和６年８月２８日（水） 出張授業「認知症サポーター養成講座」
- ・令和６年９月１３日（金） 出張授業「高齢者とのコミュニケーション」
- ・令和６年９月１７日（火） 実習 「高齢者インタビュー」
- ・令和６年１０月４日（金） 合同授業・演習「徘徊模擬訓練」
- ・令和６年１０月７日（月） 出張授業「徘徊模擬訓練まとめ」
- ・令和６年１１月８日（金） 合同授業「パラスポーツ体験：車椅子ラグビー」
- ・令和６年１２月３日（火） 出張授業「発達障害について考える」
- ・令和６年１２月１０日（火） 合同授業・来校授業「発達障害について考える」
- ・令和７年２月２６日（水） 合同授業・来校授業「地域活動研究報告会」
- ・令和７年２月２７日（木） 合同授業・来校授業「キャリア形成について考える」

※介護学校教職員、高等学校教員は随時授業に参加

※計７回の来校授業。合同授業は６回。

※６年１１月８日、７年２月２６日は地域公開講座としても実施した。

1 学年同様に介護学校教職員及び高等学校教員は随時授業に参加するというスタイルにして実施した。そのうち特筆すべきは、認知症の理解に関するもので、認知症サポーター養成講座、認知症VR体験、高齢者とのコミュニケーション等の授業を挟めて、地域住民の協力・参加を得て、徘徊模擬訓練を実施している。このことから地域住民参加型の学びを実施することで、共に考える機会づくりにも関連すると思われる。なお、この一連の認知症の理解・啓発に関しては、栗山町役場福祉課が一般住民を対象とした認知症VR体験の機会を設定している。これら関係機関や地域にある人的・物的な社会資源を活用できるのは、公立校の強みであるともいえる。

(4) 開発したプログラム：授業概要資料 1 学年

①栗山の福祉の歴史と今

【授業概要】

日	時	令和6年5月15日(水)	14:20~15:10
場	所	栗山高等学校	視聴覚室
対 象 者		北海道栗山高等学校1年生(49名)	
担 当 者		高倉淳さん、栗山高等学校教員梅津 学先生 (介護福祉学校学校長、専任教員1名および高専連携支援員聴講)	
テ ー マ		くりやまの福祉の歴史と今	
講 師		栗山町元助役 高倉 淳 氏	
スケジュール		14:20 高倉さん講義 15:10 終了	
使 用 物 品		【栗山高等学校学校備品等】 プロジェクター1台	

【授業の様子】



【備考】

- ・栗山町に北海道介護福祉学校が出来た経緯
- ・福祉についてとその歴史
- ・今後社会人になるにあたって大切なこととは

②栗山と福祉：歩行介助と車いす介助

【授業概要】

日 時	令和 6 年 9 月 11 日（水） 10：45～12：35
場 所	北海道介護福祉学校
対 象 者	北海道栗山高等学校 1 年生（49 名）
担 当 者	北海道介護福祉学校専任教員および高専連携支援員
テ ー マ	歩行の介護、車椅子の介護の基本
スケジュール	10：45 講義（介護のイメージ、介護に必要な心構え、高齢者の状態変化） 10：55 体験演習Ⅰ：椅子への着座基本動作、介護動作 11：10 歩行介護について（杖の説明） 11：15 休憩 11：25 体験演習Ⅱ：車椅子の基本的機能、操作体験 体験演習Ⅲ：車椅子操作体験（段差、スロープ、砂利道） 12：00 本日の振り返り（体験で気づいた注意点、分かったこと） 12：25 終了 ※体験演習Ⅰ、ⅡおよびⅢに関しては、文末の備考欄参照
使 用 物 品	【北海道介護福祉学校備品等】 車椅子 25 台、段差のセット（段差、スロープ、砂利道）T 字杖、多点杖 ロフトランド杖、松葉杖

【留意点】

- 1 体験を通して気づく大切さ
 - ①自分とは違う他者の気持ちを理解することは容易ではない。
 - ②相手と接し、話を聴くことで、その人の気持ちを汲み取る。
 - ③自らが介護を必要とする人を疑似体験することで考える契機に。
 - ④介護を必要とする人との信頼関係をつくるための心構えを養う。

【使用資料（パワーポイント一部抜粋）】

体験を通して気づく大切さ	介護に必要な心構え ① （接遇）
・自分とは違う他者の気持ちを理解することは容易ではない。  ・相手と接し、話を聴くことで、その人の気持ちを汲み取る  ・自らが介護を必要とする人を疑似体験することで考える契機に  ・介護を必要とする人との信頼関係をつくるための心構えを養う	○ 相手に対して配慮すること（心身の状況に応じて） → ご本人ができないこと、継続してできること 必要としていること・・・ ○ 互いが心地よく過ごすための、思いやりの気持ちと行動 ○ 身だしなみや言葉遣い、態度も意識していく

これらの杖は何のためにありますか？ T杖 ← 多点杖 ← ロフトランド杖 ← 松葉杖 ←	介護を必要とする人が安心して生活するために 安全 自立 尊厳
---	---

【授業の様子】



講義



杖体験



車いす体験

【備考】

1 椅子への着座基本動作、介護動作

① 私たちが普通に立ち上がる際

- ・ 膝位をつかむ
- ・ 膝より頭を前に出して前傾姿勢をとる
- ・ 頭を前に出すことでお尻が上がり立ち上がれる
- ・ 立ち上がった際は足を肩幅に広げ姿勢をまっすぐ正す

② 立ち上がりの介護をする際

- ・ 正面には立たず、ふらついて支えられる位置（横）に立つ
- ・ その方の出来る力を発揮してもらえよう過度な介護をしない

※②の介護をするにあたり①を自分で体験し、どのようなことを意識すればよいのかを考えてもらう

2 車椅子の基本的機能、操作体験

- ① 車椅子はどのような時に使用するのか
- ② 車椅子の名称説明
- ③ 車椅子の広げ方、たたみ方

3 車椅子操作体験（段差、スロープ、砂利道）

- ・ 2人1組になり段差、スロープ、砂利道、細い道を体験（利用者、介護者両方体験）

③栗山と福祉：車椅子で栗山公園に外出

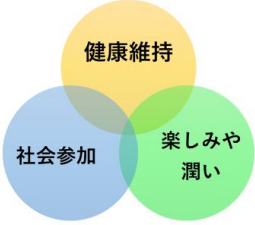
【授業概要】

日 時	令和 6 年 9 月 19 日（木） 8：45～12：35
場 所	北海道介護福祉学校、栗山公園
対 象 者	北海道栗山高等学校 1 年生（49 名） 北海道介護福祉学校 1 年生（22 名） 計 71 名
担 当 者	北海道介護福祉学校専任教員、非常勤講師および高専連携支援員
内 容	移動をとまなう介護の体験、車椅子で町内を外出
スケジュール	9：00 講義・説明（外出する目的、外出にあたっての注意点） 9：30 栗山高等学校学生 介護福祉学校出発 9：45 北海道介護福祉学校学生 介護福祉学校出発 9：50 園内車椅子散策（歩道及び舗装路、勾配、砂利道の移動体験） 11：00 栗山高等学校学生 栗山公園出発 11：10 北海道介護福祉学校学生 介護福祉学校出発 11：15 振り返り、まとめ 12：10 終了 ※園内車椅子散策に関しては、文末の備考欄参照
使 用 物 品	【北海道介護福祉学校備品等】 車椅子 22 台（予備 3 台）、空気入れ 1 台

【留意点】

- この体験を通して何を学ぶのか
 - ①高齢者の気持ちになって必要なことは何か？
 - ②介護者の気持ちになって必要なことは何か？

【使用資料（パワーポイント一部抜粋）】

< 高齢者にとっての外出の目的 > 	< 車いすを使った外出のお手伝い > 【外出計画】 ●車いすでの移動が可能かどうか → トイレ・スロープや段差、路面状態・休憩場所 → 車いす1名に対し、2名以上居れば安心 ●距離と移動時間・移動方法 ●車いすの点検（空気圧・ブレーキ具合）・天候と持ち物
< 体験で何を考えて欲しいか > ・ 高齢者の気持ちになって必要なこと ・ 介護者の気持ちになって必要なこと ・ バリアフリーの面で改善すべきこと	< 安全のポイント> 必ず声をかける！ ・ 停車時は両ブレーキをかける ・ フットサポートに足を乗せ深く座る ・ アームサポートにしっかりと掴まる ・ 傾斜のある下りは、後ろ向きで降りる ・ 段差を越えるときは、ティッピングレバーを踏みキャストを上げる 

【授業の様子】



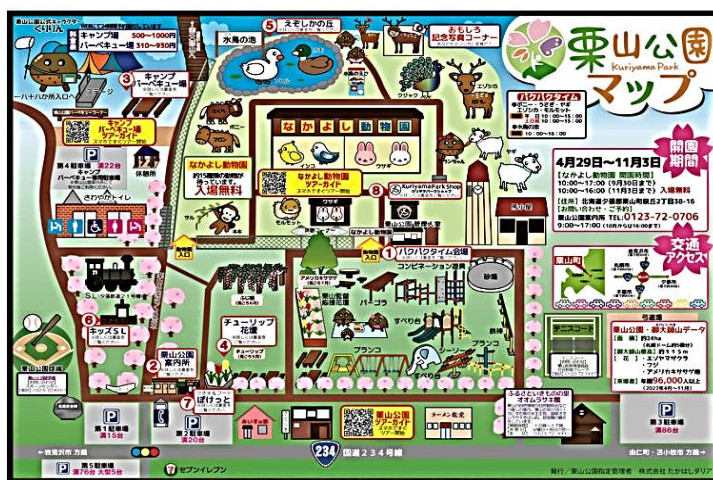
【備考】

1 栗山公園での流れ

- ・北海道介護福祉学校学生 1 名 + 栗山高等学校学生 2～3 名がペアになり (全 22 グループ)
- ・介護学生が筆頭となり車椅子の操作方法を指導
- ・22 グループが 1 列になり移動

前方（北海道介護福祉学校専任教員）、中間（高専連携支援員）、後方（非常勤講師）に職員配置

- ・第三駐車場⇄野球場観覧席付近⇄野球場横ベンチを往復し、利用者役、介護者役の両方を体験



2 栗山公園に行くうえでの注意点

- ・事故やトラブルが無いよう、安全面での介護を最優先して行う。
- ・他の来園者の移動の妨げにならぬよう、整列と前後の車間距離を保ちながら移動。

④栗山と福祉：施設訪問事前指導（出張講義）

【授業概要】

日 時 令和 6 年 10 月 3 日（木） 13：20～14：10
場 所 栗山高等学校 視聴覚室
対 象 者 北海道栗山高等学校 1 年生（49 名）
担 当 者 北海道介護福祉学校専任教員
テ ー マ 高齢者とのコミュニケーション
スケジュール 13：20 講義：コミュニケーションについて
演習Ⅰ：第一印象をよくする挨拶
演習Ⅱ：立ち止まって行う挨拶
14：10 終了
※体験演習Ⅰ、Ⅱに関しては、文末の備考欄参照
使 用 物 品 【栗山高等学校学校備品等】
プロジェクター1 台

【授業の様子】



講義



演習



演習



演習

【備考】

- 1 演習Ⅰ
マスクを付けた状態で第一印象をよくする挨拶の練習
- 2 演習Ⅱ
高齢者のスピードと私たちは違うため、相手に合わせて立ち止まって行う挨拶の練習

⑤栗山と福祉：特別養護老人ホームくりのさと、北海道介護福祉学校見学

【授業概要】

日	時	令和 6 年 10 月 10 日（木）11：45～12：35（2 組）・14：20～15：10（1 組）
場	所	特別養護老人ホームくりのさと、北海道介護福祉学校
対	象	北海道栗山高等学校 1 年生（44 名）1 組 23 名、2 組 21 名
担	当	北海道介護福祉学校専任教員 1 名、事務局長および高専連携支援員
テ	ー	マ
ス	ケ	ジュール
	10：45	特別養護老人ホームくりのさと見学
	11：45	北海道介護福祉学校 学校説明
	12：10	校内案内、カリキュラムにおける一部体験
	12：25	2 年間の学校生活の紹介
	12：35	終了

13：20	特別養護老人ホームくりのさと見学
14：20	北海道介護福祉学校 学校説明
14：45	校内案内、カリキュラムにおける一部体験
15：00	2 年間の学校生活の紹介
15：10	終了

※学校説明および一部体験に関しては、文末の備考欄参照

使 用 物 品 【北海道介護福祉学校備品等】

特浴機器、ナノミストバス、モニター1 台

【使用資料（パワーポイント一部抜粋）】

特色ある学び

国家試験対策
(国家試験合格への学び)

- ・指定科目（1,068時間）
- ・国家試験対策講座（72時間）
- ①国家試験への動機づけ
- ②国家試験対策講座の受講
- ③夏季・冬季集中対策講座
- ④模擬試験の実施（8回）

地域活動研究
(地域福祉の理解を深める学び)

“福祉のまちづくり”の特性を最大限に活用し、地域に暮らす人々の生活実態に親れ、個別または地域特有の課題を知ることにより、幅広い視点と次世代の専門職に求められる資質を持った介護福祉士を育てる

キャリア形成支援講座
(自らの職業を考える学び)

- ・介護現場等における現状と課題を理解し、改善・解決に向け実践できる人材
- ・専門職としてのキャリア形成を考え、学びと成長を続ける人材
- ・専門職としてだけでなく、社会人として必要な素養を身につけた人材

- 超高齢化社会を支え変化に対応できる人材
- 介護ニーズの複雑化・多様化・高度化に対応できる人材
- 介護職として地域や職場の中核的役割を担える人材

2年間の学費

※山形県にお住まいの方の注：「介護人材の確保に関する包括連携協定」を締結している山形県、宮城県、岩手県、秋田県、青森県、山形県、福島県、茨城県、栃木県、群馬県、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、新潟県、富山県、石川県、福井県、山梨県、長野県、岐阜県、静岡県、愛知県、三重県、滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県、徳島県、香川県、高松市、愛媛県、高知県、福岡県、佐賀県、大分県、熊本県、鹿児島県、沖縄県。山形県にお住まいの方で、県外の施設を受けて入ると「入学金+1年次授業料」合わせて20万円前後の負担があります。

学費	区 分	合計	1年次		2年次		合計
			前期	後期	前期	後期	
入 学 料	A O入学金 初年度・第1年度	50,000	—	—	—	—	50,000
授業料	初年度・第1年度 A O入学金	—	145,000	145,000	195,000	195,000	680,000
施設費	—	100,000	—	100,000	—	—	200,000
教育費	—	50,000	—	50,000	—	—	100,000
小 計	初年度・第1年度 A O入学金	50,000	295,000	145,000	145,000	195,000	1,030,000
	A O入学金	50,000	345,000	195,000	345,000	195,000	1,130,000
その他	—	150,000	100,000	200,000	50,000	—	500,000
合計（計=①）	初年度・第1年度 A O入学金	50,000	445,000	245,000	595,000	245,000	1,530,000
	A O入学金	50,000	495,000	295,000	645,000	245,000	1,630,000

*入学金に上記以外の費用がかかります。教材費や実習費などは「その他授業料」にすべて含まれています。

その他授業風景

栗山と福祉

【授業の様子】



学校説明



特浴機器体験



ナノミストバス体験

【備考】

1 学校説明

北海道介護福祉学校事務局長より以下の内容について説明した。

- ①現代の介護問題について（少子高齢化社会）
- ②介護福祉士の仕事について
- ③本校の特徴について（学費、独自のカリキュラム、国家試験合格率、就職率、編入率）
- ④栗山町について（アクセス、町の特徴、学生寮・アパート・下宿について）

2 一部体験

（１）特浴機器体験

実際にどのような介護場面で使用されるものなのか、機械の特徴、機械の操作方法

（２）ナノミストバス体験

実際にどのような介護場面で使用されるものなのか、機械の特徴、使用することでどのような効果をもたらすのか

⑥栗山と福祉：視覚障がい者の手引き歩行・白杖を使った歩行体験

授業概要】

日	時	令和 6 年 10 月 31 日（木）	13：20～15：10
場	所	北海道介護福祉学校	205 教室、講堂
対 象 者		北海道栗山高等学校	1 年生（49 名）
担 当 者		北海道介護福祉学校専任教員および高専連携支援員	
テ ー マ		視覚に障がいのある人を理解する	
スケジュール	13：20	全体講義：視覚障がいがある人の状態像	
	13：40	全体講義：疾患による見え方の変化を知る	
	13：50	休憩	
	14：00	体験演習Ⅰ：①手引き歩行の体験（階段歩行）	
		②白杖歩行（手引き有・無）	
	14：50	全体のまとめ：感想、意見交換	
	15：05	終了	
		※体験演習Ⅰに関しては、文末の備考欄参照	

使用物品 【北海道介護福祉学校備品等】

アイマスク 25 枚、白杖 25 本、絨毯 3 枚、段差 3 個、パイプ椅子 3 脚

【留意点】

1 この授業を通して考えるテーマ

- ①見えにくいことで、どのような気持ちになるのだろうか？
 - ②見えにくいことで、生活の中でどのような影響があるのだろうか？
 - ③目の健康を保つためにはどのようなことが必要なのだろうか？
- これらを発表させ、全体で意見を共有した。

【使用資料（パワーポイント一部抜粋）】

この見え方は、何の病気でしょうか？③  正常な見え方 ゆがんで見える 中心が暗く見える ほやけて見える 加齢黄斑変性症	考えてみましょう！ 1. 見えにくいことで、どのような気持ちになるか？ 2. 見えにくいことで、生活の中でどのような影響があるか？ 3. 目の健康を保つためにはどのようなことが必要か？
生活の中で必要なこと・理解すべきこと①  導線ブロック 警告ブロック ホーム端警告ブロック	生活の中で必要なこと・理解すべきこと③  Welcome! ほじょ犬 白い杖のシンボルはあなたのサポーターを添えています。 歩行者 障害者

【授業の様子】



講義



手引き歩行体験

【備考】

1 白杖とは

(1) 全盲、弱視、視野障がい、低視力などの視覚障がいのある方が、歩行する時に使用する白い

杖のことをいう。

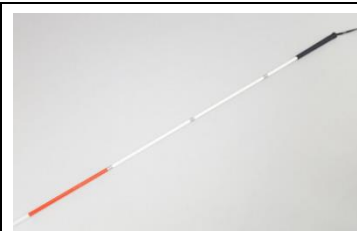
情報（周りの状況把握）、安全（身体の安全）、シンボル（自分の存在を知らせる）といった

3つの機能がある。

(2) 留意点（手引き歩行ガイドヘルプ）

- ①利用者の正面から声をかける
- ②手の甲で合図をし、斜め前に立ち、肘をつかんでもらう
- ③狭いところは肘を曲げる
- ④動くとき、曲がる時は状況を分かりやすく説明する
- ⑤障害物の前では一旦停止する
- ⑥椅子やテーブル等には、実際に手で触れてもらう
- ⑦階段では、手すりに掴まり歩いてもらう

※講堂にて2人1組になり、1人が利用者役としてアイマスクを着用し、もう1人がガイドヘルプ役として絨毯や段差等の障害物を越えて椅子に座るという一連の流れを体験してもらった。



白杖の実物

長さ 1m～1.4m 程度のものが一般的。脇の下までの長さのものを選定し、使用する。

⑦栗山と福祉：パラスポーツ体験

【授業概要】

日 時 令和 6 年 11 月 8 日（金） 13：20～15：10
場 所 栗山スポーツセンター
対 象 者 栗山高等学校 1 年生（49 名）栗山高等学校 1 年生（48 名）
北海道介護福祉学校 1 年生（19 名）、2 年生（22 名） 計 138 名
担 当 者 ラグビーチーム silverbacks 関係者
テ ー マ 地域共生社会におけるパラスポーツ等を体験する
スケジュール 13：30 講話：①障害に関する理解、中途障害と生活、パラスポーツ等について

②介護用車いすとスポーツ用車椅子の違いの説明

14：10 体験演習 I

①車椅子体験

②ミニゲーム

15：10 終了（介護学生は 16 時 10 分まで参加）

※体験演習 I に関しては、文末の備考欄参照

使 用 物 品 【北海道介護福祉学校備品等】
標準型車椅子 4 台、最新型モジュール型車椅子 2 台
【栗山スポーツセンター備品等】
プロジェクター1 台、マイク、スクリーン、ビブス 10 着、コーン 10 個

【授業の様子】



講話



車椅子体験



車椅子体験

【備考】

1 目的

①共生社会を目指す視点でパラスポーツを実際に体験し、障害者スポーツの実際を学ぶ

2 体験

①車椅子体験

・ラグビー用車椅子に 1 人ずつ乗り、ラグビー選手とタックルをする体験を実施

スポーツ用車椅子



ラグビー用車椅子

車いすに乗って戦うラグビーで、四肢麻痺者など比較的思い障がいのある人が競技できるスポーツとして考案された。

攻撃型→細かい動きが出来るようにコンパクトな作りが特徴

守備型→相手の動きを止める為に突き出したバンパーが特徴

②ミニゲームは時間の都合上実施せず

⑧栗山と福祉：ブラインドマラソンとインディアカの体験

【授業概要】

日	時	令和 6 年 12 月 5 日（木）	9：40～11：20
場	所	北海道栗山高等学校	体育館
対	象	北海道栗山高等学校 1 年生（48 名）	
		北海道介護福祉学校 1 年生（22 名）	計 70 名
担	当	者	北海道介護福祉学校専任教員および高専連携支援員
テ	ー	マ	パラスポーツを通して「できる可能性」を考える
スケ	ジュ	ール	9：40 全体説明・講義
			9：50 体験演習Ⅰ：ブラインドマラソン（並走・伴走体験）
			10：15 グループワークⅠ：体験演習を終えての気づきと感想
			10：25 休憩
			10：35 体験演習Ⅱ：インディアカ（サーブ・レシーブの基本体験、ラリー競争）
			11：10 グループワークⅡ：体験演習を終えての気づきと感想
			11：20 終了

※体験演習ⅠおよびⅡに関しては、文末の備考欄参照

使 用 物 品 【北海道介護福祉学校備品等】

アイマスク 25 枚、インディアカ 20 個、きずな 25 本、電子ホイッスル
ストップウォッチ

【栗山高等学校備品等】

バドミントン（支柱 8 本、ネット 4 張）、コーン 16 個、プロジェクター
1 台

【留意点】

1 本時で考えてほしいこと

- ①パラスポーツにはどのような人たちが参加・交流が出来るか？
- ②準備、実施上で「工夫」「配慮」すべきことは？
- ③私たちがパラスポーツを知ることのできることは？

【使用資料（パワーポイント一部抜粋）】

日本のパラスポーツ誕生の契機（一部抜粋）

【第二次世界大戦後】

- ・身体障害者福祉法の成立（1949年）
戦争により多くの傷を負った人への日常生活や社会生活を総合的に支援する政策
- ・1960年 中村 裕医師（整形外科医）が英国の留学を契機に、リハビリテーションの一環としてのスポーツを提案し、車いすの人が参加できる競技として国内大会の開催、1964年の東京パラリンピックの開催に尽力した。パラスポーツの父と呼ばれている。

※ paraplegia：対麻痺（身体障害による） 「Paralympic Games」
※ Olympics：オリンピック

スポーツそのものの多様性

【ニュー スポーツ】

- ・子どもから高齢者まで参加でき、簡単にアレンジされているスポーツをいう。レクリエーションとしても実施できる。

【パラ スポーツ】 para（並行する）

- ・障がい者（身体・知的・精神）が行えるスポーツを改定、考案しながら、誰もが参加し、楽しめるものをいう。

【アダプテッド スポーツ】

- ・誰もが参加しやすいように、ルールや用具を工夫し、適合（adapt）させたスポーツをいう。



【授業の様子】



ブラインドマラソン



インディアカ



グループワーク

【備考】

1 ブラインドマラソンとは

- (1) 視覚障がい者が行うマラソン競技。「きずな」を使用し視覚障がい者と伴走者が一緒に走る。
- (2) 伴走者の役割…①障がい者ランナーの安全確保・状況説明
②理想のフォームで走ってもらえるような伴走
③走路、ペースなどの指導と楽しく、楽に走れるようなエスコート
④タイムなどの記録

(3) 留意点

障がい者ランナーは足元の不安から歩幅が狭くなりがちなので、伴走者は少しでもその不安を和らげ、安心して走れると感じてもらうことが必要（信頼）。手の振り、スピードを合わせてほしいが言い出せないこともあるので、相手が言いやすい雰囲気づくりを考える（気遣い）。

※きずなとは伴走時、障がい者ランナーと伴走者を繋ぐもの

	きずなの実物 約 1 メートルの長さの紐を輪にして使用する。	 きずなの代用品 今回は輪ゴムを 3 つ組み合わせて作成して代用した。 写真下…50 cm 定規
---	--	---

2 インディアカとは

羽根のついたシャトルcock上のボール（羽根つきボール）を、平手で打ってネットを挟んで相対した2チームが、互いに平手で打ちあう団体競技。サーブから初め、レシーブ・トス・アタックの三段構造で敵陣に3回以内にボールを返す。

※今回は8～9人グループを8つ作り、バドミントンコートを半面ずつ使用し、各グループに2～3個羽根つきボールを配布し実施した。

インディアカ写真



⑨栗山と福祉：福祉機器の見学・体験

【授業概要】

日 時	令和 7 年 2 月 5 日（月） 13：20～15：10
場 所	北海道栗山高等学校 第二介護実習室、第三介護実習室
対 象 者	北海道栗山高等学校 1 年生 49 名
担 当 者	北海道介護福祉学校専任教員および高専連携支援員および 特別養護老人ホーム南幌みどり苑 佐久間施設長
テ ー マ	高齢者施設の実践・ICT 化から考えること
スケジュール	13：20 南幌みどり苑 佐久間施設長 講義 14：10 休憩 14：20 福祉機器見学・体験 1 組：移乗・移動関連用具（第二介護実習室） 2 組：移動用リフト実演・体験（第三介護実習室） 14：45 2 組：移乗・移動関連用具（第二介護実習室） 1 組：移動用リフト実演・体験（第三介護実習室） 15：10 終了 ※福祉機器見学・体験に関しては、文末の備考欄参照

使 用 物 品	【北海道介護福祉学校備品等】 電動ベッド 5 台、シーツ 5 枚、枕 5 個、枕カバー 5 枚、床頭台 1 台、 スライディングボード 3 台、スライディングシート 1 枚、モジュール 型車いす 1 台、最新型モジュール型車いす 1 台、リクライニング車い す 1 台、標準型車いす 2 台、多機能型歩行車 1 台、室内用歩行器 1 台、 床走行式リフト 1 台、エアーマット 1 台、ビーズクッション 2 個、棒 座 2 個
---------	---

【使用資料（パワーポイント一部抜粋）】

本日のねらい - 福祉用具は、誰の、何のためのものかを考えてみましょう。 - 見学や体験を通して、使う人にとってどのような目的や効果があるのかを考えてみましょう。 今、私たちが出来ること、行うべきことは何かを考えてみましょう。	福祉用具とは 福祉用具の研究開発及び普及の促進に関する法律（平成 13 年） （定義）第二条 「心身の機能が低下し、日常生活を営むのに支障のある老人又は障害者の日常生活上の便宜を図るための用具及びこれらの者の機能訓練のための用具並びに補装具をいう」
--	--

床走式 電動介護用リフト 【状態像】 ベッドからの起き上がりや立ち上がり、歩行が困難な人 【使用すべき場面】 ベッド ⇄ 車いす等、移動動作が必要なとき 【効果】 吊り具を使用して移動することで、介護者、利用者の身体的負担が軽減 	スライディングボード  【状態像】 膝や股関節に痛みがある方、足底に力が入る方、上肢を活用できる方など 【使用すべき場面】 ベッド⇄車椅子 椅子⇄車椅子 トイレ⇄車椅子 車⇄車椅子 など移乗動作が必要なとき 【効果】 膝などの痛みで立位がとれない方でも、自分の力を活用しながら移乗できる
---	--

【授業の様子】



講義



移動用リフト実演・体験



床ずれ防止用具



移乗・移動関連用具



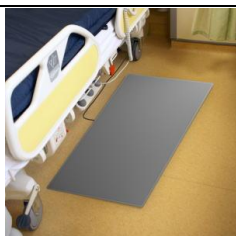
移乗・移動関連用具



移乗・移動関連用具

【備考】

1 離床センサー（シート・マットタイプ）



ベッドからの起き上がりや、立ち上がりに不安がある方などが使用する。病院や施設などのベッドに付属し、身体動作をセンサーで感知して介護者に知らせ、移動動作の見守りを行う。使用することでベッドからの転落や転倒を防ぐことができる。

2 エアーマット（床ずれ防止用具）



病気や治療により、ベッド上での寝たきりが続き、寝返りが困難な方などが使用。使用することで寝ている状態により、かかる体圧を分散し皮膚の圧迫を避ける。

使用することでベッド上で過ごす時間が増えても、床ずれを防止することができる。

3 ビーズクッション（床ずれ防止用具）



病気や治療により、ベッド上での寝たきりが続き、寝返りが困難な方などが使用。使用することで寝ている状態により、かかる体圧を分散し皮膚の圧迫を避ける。

使用することでベッド上で過ごす時間が増えても、床ずれを防止することができる。

4 床走行式 電動介護用リフト



ベッドからの起き上がりや立ち上がりが困難な方などが、ベッドから車いすなど移動動作が必要なときに使用する。釣り具を使用して移動することで、介護者と利用者の身体的負担が軽減される。

5 電動ベッド



休息や睡眠を図る時、生活動作（食事や口腔ケア）をする時などに使用する。背上げ機能や足上げ機能・上下機能の活用により寝たきりを防止し、ベッド上で行えることが増える。また、介護者の負担軽減にもつながる。

6 スライディングボード



膝や股関節に痛みがあり、立ち上がりが困難な方などが使用する。車椅子からベッド、椅子、トイレ、車などに座った状態でお尻を滑らせ、自分の力を活用しながら移乗することができる。

7 スライディングシート



自力で移動することが困難な方などが移動する使用。自分の力を活用しながら寝返りや車いす、ストレッチャーなどへ移動することができる。

8 最新型モジュール型車いす



長時間の歩行が困難な方などが移動する際使用。背張り機能や座面の高さ調節などがついているため、自分に合った車いすに変えることができる。長時間安定して乗ることが出来るため、外出先が増え行動範囲を広げる支援につながる。

9 リクライニング車いす



全介助や血圧に変動のある方（長時間座っているのが困難）などが移動する際使用。フラットな状態にできるので、寝たきりの方でも車椅子を使用することで外出先が増え、寝たきりを防止できる。

10 多機能型歩行車



一人で歩くのは困難だが、何かに掴まりながら歩行できる方などが室内、外で歩く際使用する。前輪がダブルキャスターになっているため、外出先で地盤が悪いところでも安定して移動することができ、椅子がついているため小休憩をとることもできる。

1 1 室内用歩行器



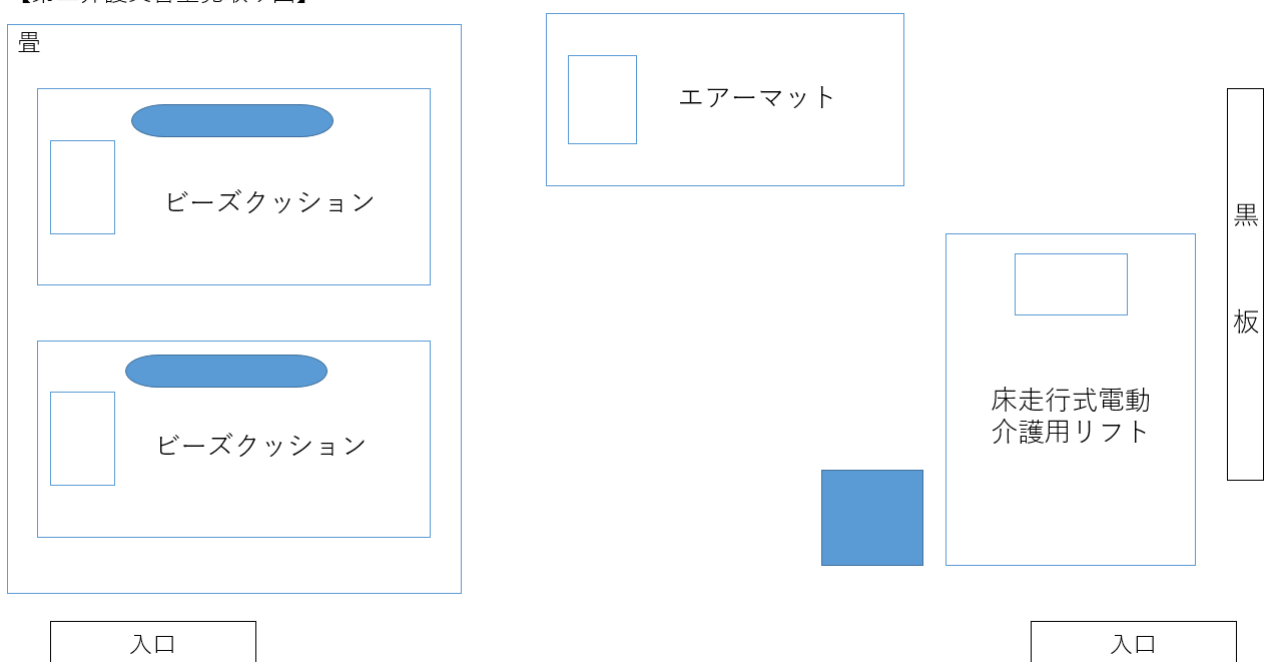
一人で歩くのは困難だが、何かに掴まりながら歩行できる方などが移動する際室内で使用。軽くて小回りが利くので、室内でも転倒リスクが少なく移動することができる。

※各福祉用具に 4～5 名高校生を配置し、ローテーションしながら全福祉用具を体験する

【第二介護実習室教室見取り図】



【第三介護実習室見取り図】



（５）開発したプログラム：授業概要資料 ２学年

①栗山と福祉：高齢者疑似体験

【授業概要】

日	時	令和 6 年 5 月 9 日（木）	10：45～12：35
場	所	北海道介護福祉学校	205 教室
対 象 者		北海道栗山高等学校 1 年生	（49 名）
担 当 者		北海道介護福祉学校専任教員および高専連携支援員	
テ ー マ		老化に伴う身体的特徴と生活の影響について疑似体験を通して理解する	
スケジュール	10：50	全体講義：高齢者の身体的変化について	
	11：15	体験演習：①視覚体験（2 組） ②聴覚体験（2 組） ③歩行体験（1 組）	
	11：10	休憩	
	11：50	体験演習：①視覚体験（1 組） ②聴覚体験（1 組） ③歩行体験（2 組）	
	12：10	全体のまとめ：感想、意見交換	
	12：30	終了	
		※体験演習に関しては、文末の備考欄参照	
使 用 物 品		【北海道介護福祉学校備品等】	
		視覚障がい体験ゴーグル 5 セット、可動域制限 5 セット、重りベスト 5 セット、 イヤーマフ 2 セット、スロープ 1 台、段差 1 台、お箸 2 膳、お皿 4 枚、 スプーン 2 個、瓶（大・小）1 個、ビーズ、丸椅子 50 脚、椅子 4 脚、 机 3 台、軍手 2 セット	

【授業の様子】



講義



視覚体験



聴覚体験



歩行体験



関節可動域制限



感想・まとめ

【備考】

1 視覚体験（10 分）

- ①視覚障がい体験ゴーグルを装着し、軍手（2 枚履き）を履き手首に重りをつけた状態で箸を使ってビーズをつかむ
- ②視覚障がい体験ゴーグルを装着し、軍手（2 枚履き）を履きコインをつかむ
- ③視覚障がい体験ゴーグルを装着し、軍手（2 枚履き）を履き瓶の蓋を開ける

2 聴覚体験（10 分）

- ①聞く側・話す側に分かれて、聞く側はイヤーマフを付ける。話す側はマスクを着けてお題に沿って話をする。遠い所からはじめ、聞く側が聞こえるところまで少しずつ近づく。

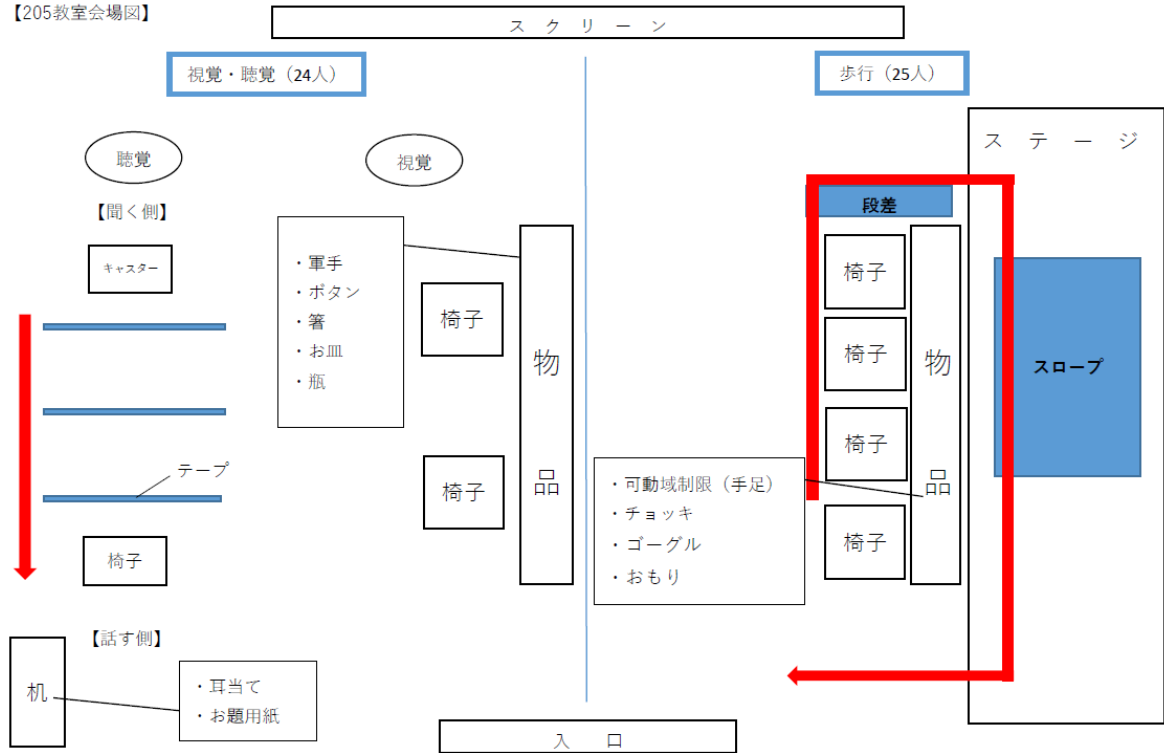
3 歩行体験（20 分）

- ①2 人 1 組になり、介護者役、利用者役両方を体験。高齢者疑似セット（ゴーグル・可動域制限・重り・重りベスト）を付けて段差越え、スロープ越えを体験。

視覚障がい体験  白内障や緑内障の方の物の見え方が体験出来るもの。	聴覚体験  高齢者の耳の聞こえにくさが体験できるもの。つけることで音が小さくこもって聞こえる。
関節可動域制限  高齢者の手足の動きにくさが体験できるもの。膝と肘につけることで関節の動きにくさが生じる。	重り・ベスト  重りを入れたベストを着ることで腰が曲がった腰が曲がった高齢者の体験ができるもの。

【会場図】

【205教室会場図】



【授業概要】

【留意点】

- 1 この授業を通して考えるテーマ
 - ①居住環境整備の目的が理解できる
 - ②ベッドメイキングの方法を知ることができる
 - ③体の向きが適切に動くことができる

生活空間における生活行為の例

【 公的空間 】	【 私的空間 】
食事・団らん・接客	就寝・勉強・趣味
生活空間	
【 生理的空間 】	【 家事空間 】
排泄・入浴・洗面・身支度	調理・掃除・洗濯・裁縫

高齢者の健康維持に向けた居住空間に必要なこと

安全

衛生的

快適

ベッドメイキングの5つの原則

1. 安全・安楽
2. 効率性
3. 耐久性
4. 外観美
5. 清潔と管理

具体的な内容
としては何か？
考えてよう。

シーツのしわによる褥瘡 (床ずれ)

【授業の様子】



講義



ベッドメイキング（シーツ）



ベッドメイキング（枕）

【備考】

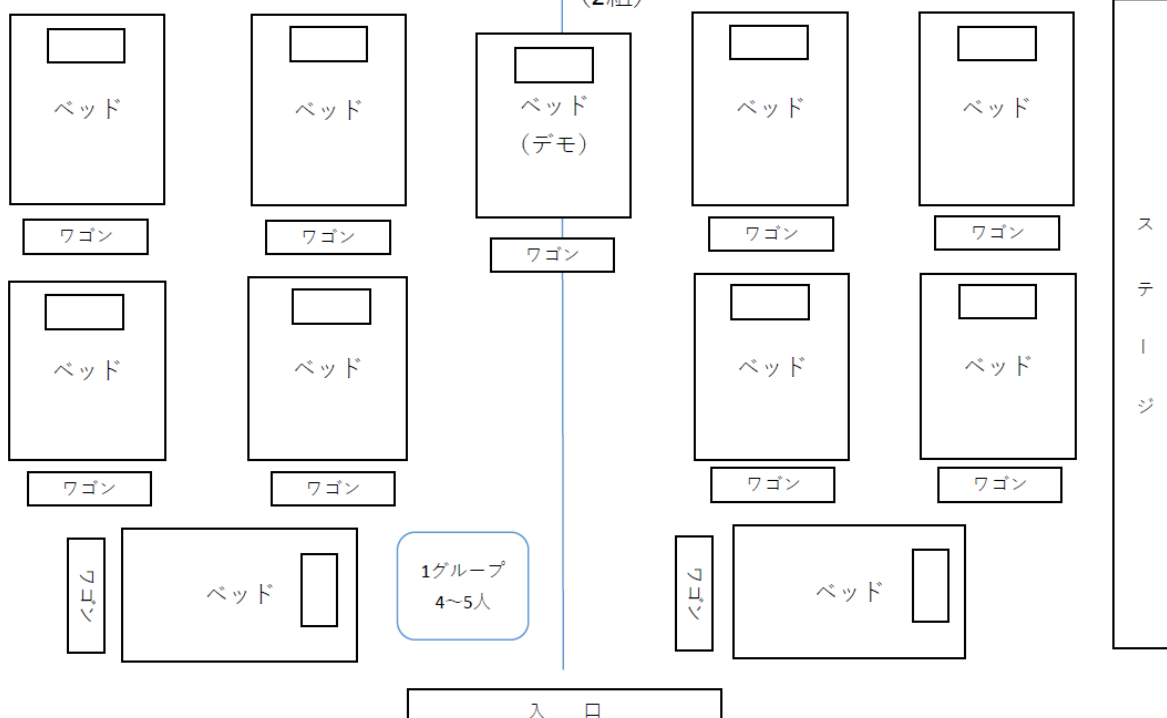
- ・ 4～5 人 1 グループ×10 ベッドに分かれてベッドメイキングを体験
(シーツ、枕、シーツの畳方)

【会場図】

【205教室会場図】

(1組)

(2組)



③栗山と福祉：体位変換

【授業概要】

日	時	令和 6 年 5 月 13 日（月）	10：45～12：35
場	所	北海道介護福祉学校	205 教室
対	象	者	北海道栗山高等学校 2 年生（46 名）
担	当	者	北海道介護福祉学校専任教員および高専連携支援員
テ	ー	マ	日常生活の姿勢と動作
スケジュール			10：50 全体講義：日常生活の姿勢と動作 11：00 デモンストレーションⅠ：自力での自然な動作 11：05 体験演習Ⅰ：自力での自然な動作 11：15 デモンストレーションⅡ：介助方法 11：20 体験演習Ⅱ：介助方法 11：40 休憩 11：50 体験演習Ⅱ：介助方法 12：15 全体まとめ 12：30 終了

※体験演習Ⅰ・Ⅱに関しては、文末の備考欄参照

使用物品 【北海道介護福祉学校備品等】

ベッド 11 台、シーツ 11 枚、枕 11 個、枕カバー 11 枚、ドラムコード 3 個、ワゴン 11 台

【使用資料（パワーポイント一部抜粋）】

本日の目標 ・姿勢と動作の基本を学び、日常動作と照らし合わせてみる ・介護の 3 つの原則を知る ・言葉掛けを行い、※協力動作を促すことができる ▫ 「できること」は、具体的に促す ▫ 「困難」や「支障」のあることをサポート ・相手を尊重する態度を養うことができる	姿勢(体位)の種類 
介護の 3 つの原則 ～ 思考から実践へ 安全・安楽 ・利用者本人、介護者双方に通じ、危険防止の視点に立つ ・転倒、転落、強打に注意し、麻痺側を保護する 自立支援 ・介護を受けながらも、生活の自立を継続する ・もっている機能や本人の強みを活用した自律へ向かう 個人の尊厳 ・その人の意向と個性が尊重され、人権が守られる ・介護を受ける人の立場に立ち、プライバシーを守る	本日のまとめ ・演習を通じた感想は？ 生活支援では自然な動作に沿って介助を行うことが基本！ ・介護者：からだの構えと動作を促す言葉がけ ・利用者：行って欲しいことを伝えることができる ↓ 双方の体験を通して、介護の重要性、専門性を学びきっかけへ

【授業の様子】



起き上がり介助



起き上がり介助



まとめ・感想

【備考】

1. 自力での自然な動作

- ①自力での自然な動作をやってもらう（普段のベッドから起き上がる動作）
- ②1人がベッドに座り、もう1人が座っている人のおでこをおさえ、その状態で真上に立ち上がること
ができるのかをやってもらう
→改めて立ち上がり時に必要な動作を確認する（人間の自然な動作）

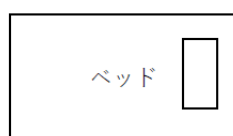
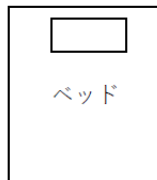
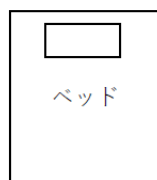
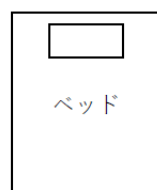
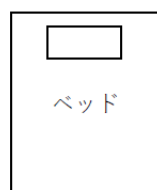
2. 介助方法

- ①仰臥位→右側臥位→端座位→立ち上がりの動作を行う

【会場図】

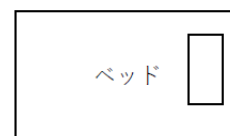
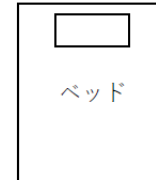
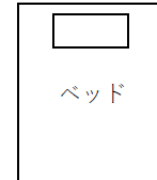
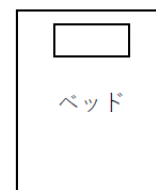
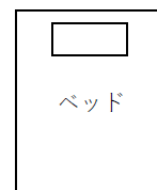
【205教室会場図】

(1組)



1グループ
4～5人

(2組)



ス
テ
ー
ジ

スクリーン

入 口

④栗山と福祉：衣服着脱・食事等

【授業概要】

日	時	令和 6 年 5 月 14 日（火）	10：45～12：35
場	所	北海道介護福祉学校 学生ホール	
対 象	者	北海道栗山高等学校 2 年生（46 名）	
担 当	者	北海道介護福祉学校専任教員および高専連携支援員	
テ ー マ		自立に向けた上衣の着衣介護・安全な食事の介護	
スケジュール	10：50	全体講義：自立に向けた上衣の着衣介護	
	11：05	デモンストレーションⅠ：上衣の着衣	
	11：15	体験演習Ⅰ：上衣の着衣	
	11：25	全体講義：安全な食事の介護	
	11：40	休憩	
	11：50	体験演習Ⅱ：自力での食事の際の咀嚼・嚥下	
	12：00	デモンストレーションⅡ：ヨーグルトの食事介助	
	12：05	体験演習Ⅲ：ヨーグルトの食事介助	
	12：15	全体まとめ・感想	
	12：30	終了	
		※体験演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲに関しては、文末の備考欄参照	
使 用 物 品		【北海道介護福祉学校備品等】	
		ビスケット 100 枚（1 人 2 枚）、ヨーグルト 50 個、スプーン 50 個	

【使用資料（パワーポイント一部抜粋）】

テーマ「自立に向けた着衣介護」 本日の目標 ・身支度の目的、基本動作（自然な動作）を理解する ・介護の原則 安全・安楽、自立支援（言葉掛け）、相手を尊重する態度で支援することができる。 ・着衣介護の原則（※着患脱健＝脱健着患）を知る →着る時は患側から、脱ぐ時は健側から	2. 衣服（身支度）の4つの目的 1) からだの保護 2) 体温調整 3) 清潔保持 4) 精神的な満足感（自分らしさを表現できる）
3. 自立に向けた着衣介護の留意点 1) 好みの衣服を準備（選択） 2) 羞恥心に配慮しプライバシーを保護する。 3) 室温を適切に保つ。 4) 脱健着患（脱ぐ時は健側から、着る時は患側から！！） 5) 安全・安楽、自立支援（介護は必要な所を手伝い、自力でできる所は見守る）	脱ぐときは患側から脱ぐと、麻痺側で曲げられない。健側を着た状態では衣服にゆとりがなく患側が脱ぎにくい。 脱ぐときは健側から脱ぐと、健側を着た状態で衣服にゆとりができた状態で患側を脱ぐことができる。 着る時は患側から着ると、麻痺側で曲げられない。健側を着てしまうと衣服にゆとりがなくなり患側が着にくい。 着る時は健側から着ると、患側を着た状態で衣服にゆとりがある状態で患側を着ることができる。

【使用資料（パワーポイント一部抜）】

摂食・嚥下の5分類 先行期 準備期 口腔期 咽頭期 食道期 食べ物を認識 食べ物を噛み食塊を作る 食塊をのどの奥に運ぶ (嚥下反射) 食塊が食道に入る 食道から胃に入る	嚥下機能が低下すると・・・ ・よくむせたり、せき込んだりする ・よく痰が絡む ・のどや胸のつかえ感がある ・食事に時間がかかるようになる ・途中で疲れ、食事を残すようになる ・飲み込みずらい物を残すようになる ・やせてくる
正しい食事の姿勢 姿勢のチェック テーブルとお腹の間に握りこぶし一つ分の余裕 テーブルが高すぎないよう調節 股関節とひざは直角に 踵をしっかりと床につける 前かがみになって頭を引く 背もたれのある椅子に深く腰掛ける	食事の観察 ・のど仏の動き（嚥下の確認） ・口腔内に食べ物が残っていないか？ ・むせ込みや咳はないか？ ・姿勢は崩れていないか？

【備考】

1. 上衣の着衣

- ①まずは普段自分が衣服を着る際の動作をやってもらう
- ②片麻痺の設定で自力で着てもらう

2. 自力での食事

- ①ビスケットを食べ、そのあと口に残った状態でもう1枚を口に入れて食べる
→その際飲み込みにくさを体験（咀嚼・嚥下の大切さを知る）

3. 食事介助

- ①2人1組のペアになり、介護者役、利用者役の両方を体験

【会場図】

【学生ホール会場図】

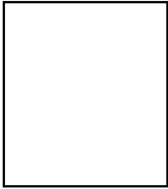
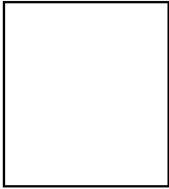
(1組)

スクリーン

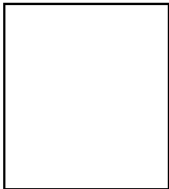
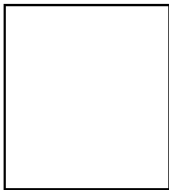
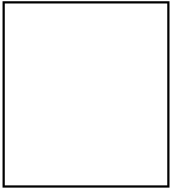
(2組)

入
口

男子



1グループ
4～5人



荷物置き

荷物置き

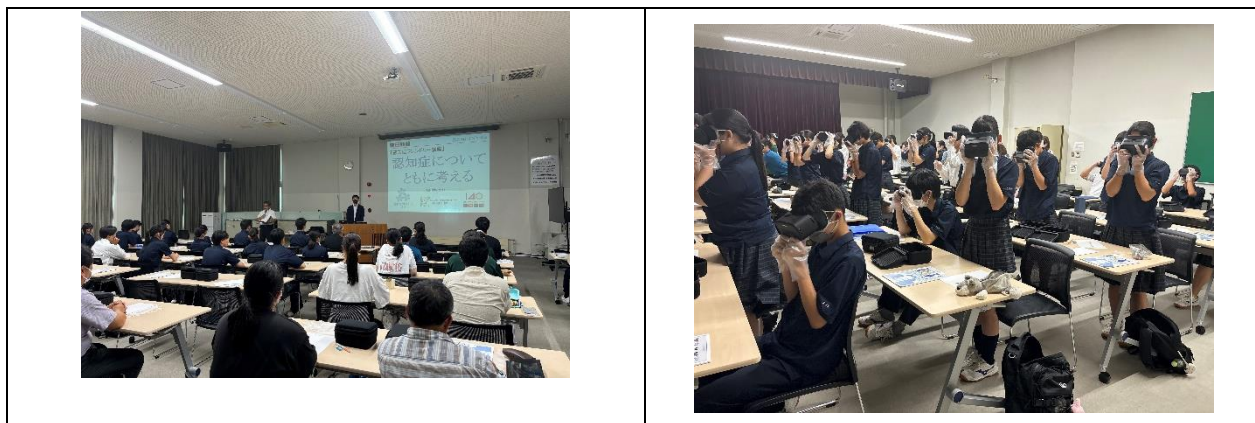
男子

⑤栗山と福祉：認知症 VR 体験

【授業概要】

日 時	令和 6 年 8 月 27 日（火） 10：45～12：35
場 所	北海道介護福祉学校 205 教室
対 象 者	北海道栗山高等学校 2 年生（46 名）、北海道介護福祉学校 1 年生（22 名）
担 当 者	認知症フレンドリー講座講師 坂田一裕氏
テ ー マ	認知症についてともに考える
スケジュール	10：45 全体講義 11：30 体験Ⅰ：認知症 VR 体験 12：00 まとめ 12：35 終了 ※体験演習Ⅰに関しては、文末の備考欄参照
使 用 物 品	【北海道介護福祉学校備品等】 プロジェクター1台、マイク2本 【認知症フレンドリー社】 VR 機器 70 台、手袋 70 セット

【授業の様子】



【備考】

・認知症 VR 体験

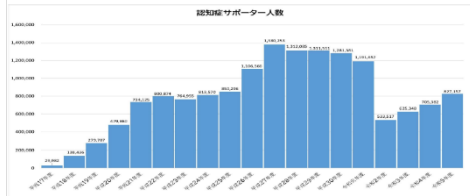
- ①バスに乗車した際、料金を支払う際に認知症の方が見えている景色を体験
- ②階段を降りる際の認知症の方が見えている景色を体験
- ③歩いている際認知症の方が見えている景色を体験（床の見え方）

⑥栗山と福祉：認知症サポーター養成講座

【授業概要】

日 時	令和 6 年 8 月 28 日（水） 10：35～12：15
場 所	栗山高等学校 視聴覚室
対 象 者	北海道栗山高等学校 2 年生（48 名）
担 当 者	北海道介護福祉学校専任教員 1 名および栗山町地域包括支援センター職員 1 名
テ ー マ	認知症を学び地域で支えよう
スケジュール	10：40 全体講義：発達障害の困りごと 12：15 終了
使 用 物 品	【栗山高等学校備品等】 マイク、モニター

【使用資料（パワーポイント一部抜粋）】

認知症サポーター養成講座とは ▶ 痴呆から認知症へ用語変更したことを契機に「認知症を知り、地域をつくる」キャンペーンとして平成17年度(2005年)より実施。 ▶ 当初は100万人の養成を目指していたが、年々増加して現在、 15,492,067人の認知症サポーター(R6年6月末) 	成年後見制度 
【オレンジカフェ】 平成27年度は社会福祉法人 愛安全会の自主事業（地域貢献）として開催 平成28年度からは栗山町の認知症地域支援・ケア向上事業にて実施（委託） 	本日のまとめ ○認知症の方にやさしい地域の実現は、国を挙げた取り組みが必要ですが、行政だけではなく、民間企業や地域住民などそれぞれの役割を果たすことが求められています。 ○認知症の方にやさしい地域は、認知症の人だけにやさしい地域ではない。 ⇒地域の繋がりが基盤となります。認知症の方にやさしい地域づくりにご協力ください。

⑦栗山と福祉：施設訪問事前指導（出張講義）

【授業概要】

日	時	令和 6 年 9 月 13 日（金）	11：45～12：35
場	所	栗山高等学校	視聴覚室
対	象	者	北海道栗山高等学校 1 年生（46 名）
担	当	者	北海道介護福祉学校専任教員
テ	ー	マ	高齢者とのコミュニケーション
スケジュール		11：45	講義：年を取ると変わる体の動き 演習Ⅰ：快い挨拶 演習Ⅱ：話の聞き方 12：35 終了 ※体験演習Ⅰ、Ⅱに関しては、文末の備考欄参照
使 用 物 品		【栗山高等学校学校備品等】 プロジェクター1 台	

【備考】

1 演習Ⅰ

快い挨拶の練習

2 演習Ⅱ

姿勢が悪い話の聞き方と姿勢が良い話の聞き方の練習

（非言語的コミュニケーションの大切さを体験から学ぶ）

⑧栗山と福祉：認知症高齢者徘徊模擬訓練

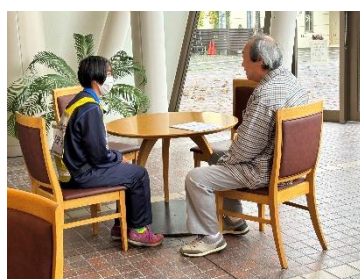
【授業概要】

日 時	令和 6 年 10 月 4 日（金） 10：45～12：35
場 所	北海道介護福祉学校 205 教室
対 象 者	北海道栗山高等学校 2 年生（46 名）
担 当 者	北海道介護福祉学校専任教員、事務局員および高専連携支援員
テ ー マ	認知症の状態にある方への具体的な関わり
スケジュール	09：00 挨拶・タイムスケジュール説明 09：10 認知症対応のデモンストレーション（良い例・悪い例） 09：30 休憩 09：40 徘徊模擬訓練 10：10 全体まとめ・感想 10：35 終了 ※徘徊模擬訓練に関しては、文末の備考欄参照
使 用 物 品	【北海道介護福祉学校備品等】 杖 4 本、寝巻 2 セット、サンダル 3 個、新聞

【目的】

- ①認知症高齢者への理解を深める（徘徊者の早期発見と対応の大切さ）
- ②徘徊高齢者の気持ちに配慮した声掛けや見守りの方法を学ぶ
- ③徘徊高齢者を地域でどのように見守っていくかを考える機会とする

【授業の様子】



【備考】

1. 認知症対応のデモンストレーション

- ・認知症の方が困った様子でうろうろしている（一部抜粋）

<悪い例>

- ①後ろから近づき「どうしたんですか？」と声を掛ける
- ②「うわ！びっくりした」と認知症の方が驚く

<良い例>

- ①少し様子を伺い違和感に気づく。正面からさりげなく近づき目線を合わせて笑顔で挨拶する

※後ろから急に声を掛けると驚いてしまう。驚いたことにより体のバランスを崩し転倒に繋がる危険性

もある。そのため、声を掛けるときは相手の視界に入りなるべく正面に行く

2. 徘徊模擬訓練

- ①下記の配置に認知症役の地域の方に待機していただく
- ②介護学生 2～3 名、栗山高校生 5～6 名の計 7～9 名を 8 グループ作り、カルチャープラザ内を歩き

困っている様子の高齢者に声を掛ける

- ③事前に認知症高齢者役の方の状態像が記載されたものを配っているので、それを基にその方の特徴を

観察しながらコミュニケーションを図る

例：散歩に出かけて休憩していたらここがどこだか分からなくなっている

特徴→靴が片方だけサンダル、パジャマの上を着ている

【会場図】



⑨栗山と福祉：パラスポーツ体験

【授業概要】

日 時 令和 6 年 11 月 8 日（金） 13：20～15：10
場 所 栗山スポーツセンター
対 象 者 栗山高等学校 1 年生（49 名）栗山高等学校 1 年生（48 名）
北海道介護福祉学校 1 年生（19 名）、2 年生（22 名） 計 138 名
担 当 者 ラグビーチーム silverbacks 関係者
テ ー マ 地域共生社会におけるパラスポーツ等を体験する
スケジュール 13：30 講話：①障害に関する理解、中途障害と生活、パラスポーツ等について

②介護用車いすとスポーツ用車椅子の違いの説明

14：10 体験演習 I

①車椅子体験

②ミニゲーム

15：10 終了（介護学生は 16 時 10 分まで参加）

※体験演習 I に関しては、文末の備考欄参照

使 用 物 品

【北海道介護福祉学校備品等】

標準型車椅子 4 台、最新型モジュール型車椅子 2 台

【栗山スポーツセンター備品等】

プロジェクター1 台、マイク、スクリーン、ビブス 10 着、コーン 10 個

【授業の様子】



講話



車椅子体験



車椅子体験

【備考】

1 目的

- ①共生社会を目指す視点でパラスポーツを実際に体験し、障害者スポーツの実際を学ぶ

2 体験

①車椅子体験

- ・ラグビー用車椅子に1人ずつ乗り、ラグビー選手とタックルをする体験を実施

スポーツ用車椅子



ラグビー用車椅子

車いすに乗って戦うラグビーで、四肢麻痺者など比較的思い障がいのある人が競技できるスポーツとして考案された。

攻撃型→細かい動きが出来るようにコンパクトな作りが特徴
守備型→相手の動きを止める為に突き出したバンパーが特徴

- ②ミニゲームは時間の都合上実施せず

⑩栗山と福祉：「発達障害について」当事者の話を聞いて考える

【授業概要】

日 時	令和 6 年 12 月 10 日（火） 10：35～12：15
場 所	北海道介護福祉学校 205 教室
対 象 者	北海道栗山高等学校 2 年生（48 名）
担 当 者	蛸子あゆみ氏および学校長
テ ー マ	発達障害について当事者の話を聞いて考える
スケジュール	10：40 全体講義：発達障害の困りごと 11：00 グループ討議 ①関わるうえで配慮すべきこと ②どのようなサポートが必要なのか ③発達障害の方を理解するために、どのような取組が必要か ④グループのまとめ 11：30 休憩 11：40 全体発表（グループごと） 12：05 まとめと感想：蛸子氏から 12：15 終了
使 用 物 品	【北海道介護福祉学校備品等】 マイク、モニター

【授業の様子】



講義



グループ討議



全体発表

【グループ討議内容（一部抜粋）】

- ①関わるうえで配慮すべきこと
- ・聴覚に頼りすぎる会話をしない
 - ・障害の有無に関わらず接する
 - ・長い文章を区切って伝える
 - ・自分の気持ちを言葉にして伝える

②どのようなサポートが必要なのか

- ・自分たちよりも音を感じやすいから、静かな場所で話す
- ・大事なことはメモにして本人に渡す
- ・その人の特性に合わせ、絵や写真を用いる
- ・端的に分かりやすく説明する

③発達障害の方を理解するために、どのような取組が必要か

- ・一人ひとり性格等は違うため、偏見とかでみるのではなくその個人を理解し、尊重する
- ・当事者の話を聞く
- ・発達障害の方に何に困っているのかを聞く
- ・特徴を知り、関わっていく

④グループのまとめ

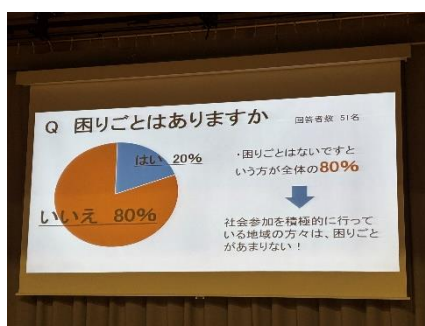
- ・まずは発達障害の方と地域のボランティアや学校等で積極的に関わり、障害について理解を深める
- ・困っていることを知らないと思慮もサポートもできないと思った
- ・差別をせず1人の人間であることを尊重して接する
- ・発達障害者に対する理解をこちら側がすることも重要だけど、当事者も「自分がこういう特性がある」と話すことも大切

⑪栗山と福祉：地域活動研究報告会聴講

【授業概要】

日	時	令和7年2月26日(水)	13:30～15:30
場	所	栗山町カルチャープラザ EKI	多目的ホール
対	象	者	北海道介護福祉学校2年生(19名)、1年生(22名) 北海道栗山高等学校2年生(48名)、施設関係者、一般住民等
担	当	者	学校長、専任教員4名、北海道介護福祉学校2年生(19名)
テ	ー	マ	地域活動研究報告会聴講
スケジュール			13:30 開会 13:40 生活支援グループ発表 14:10 地域問題解決グループ発表 14:40 休憩 14:50 ヘルスケアグループ発表 15:20 全体発表終了・質疑応答 15:30 閉会
使用物品			【栗山町カルチャープラザ EKI 等】 マイク、スクリーン

【報告会の様子】



1. 地域活動研究とは

地域には様々な人が生活し、誰にでも暮らしや課題、希望があります。「地域活動研究」では、地域に暮らす人の生活実態に触れ、個別または地域固有の課題を知ることにより、幅広い視点と次世代の専門職に求められる資質を持った介護福祉士を育成する本校の独自カリキュラムです。学びのフィールドを地域に求め、そこにある社会資源を活用し、かつ少人数で授業を展開します。学生は所属するゼミを決め、介護の専門職を目指す学生という立場で社会資源の調査、地域住民へのアンケート、ヒアリング調査、実証などを行います。

2. 各グループについて

①生活支援グループ（介護系教員が担当）

介護場面での身体的な負荷を軽減し、利用者の自立を促すことができるツールの制作を検討。

栗山町にあるものづくり工房「ファブラボ栗山」ご協力のもと“ものづくり”を通して考えた介護力の可能性について発表。

②地域問題解決グループ（社会福祉系教員が担当）

障がいのある人と、その周囲にいる人、家族や支援者等にインタビューすることで、障がいという視点からみた共生社会について考えた。出会いの中で学んだこと、気づいたことなどを発表。

③ヘルスケアグループ（看護系教員が担当）

地域との交流の機会をもつことを継続し、町民とのふれ合いやアンケート調査から知り得た暮らしの現状、健康に対する意識や行動について調査結果をもとに、より良い生活の継続に向け考察した内容を発表。

⑫栗山と福祉：キャリア形成支援講座

【授業概要】

日 時	令和 7 年 2 月 27 日（木） 10：45～12：35
場 所	北海道介護福祉学校 205 教室
対 象 者	北海道介護福祉学校 1 年生（22 名） 北海道栗山高等学校 2 年生（48 名）
担 当 者	学校長、専任教員および北海道介護福祉学校 2 年生 3 名
テ ー マ	2 年間の学びと国家試験対策・進路について
スケジュール	10：45 挨拶 10：50 授業開始 10：55 介護学生の体験談（3 名） ①就職と国家試験について ②フィンランド交換留学、大学編入、国家試験について ③フィンランド交換留学、就職、国家試験について 11：25 質疑応答 11：30 専任教員の体験談 ①看護領域から福祉領域へ、そして介護福祉士養成に携わって 12：00 校長 ①キャリア形成について 12：30 終了
使 用 物 品	【北海道介護福祉学校備品等】 マイク、モニター

【使用資料（パワーポイント一部抜粋）】

国家試験に向けて私が意識したこと ①自身に合った学習環境を用意し、時間を効率的に活用する。 ②モチベーションを一定に保つようにする。 ③分からないことをそのままにしない。	大学編入までの流れ 先生に相談 資料請求 4月 実習 5月中旬 フィンランド 学生来校 8月下旬 学校祭 9月 フィンランド 留学 帰国 9月末 必要書類の準備 志望理由書の作成 10月 書類郵送 11月 面接
沢山悩んで・・・ 美瑛町にある美瑛慈光会 美瑛慈光園に就職したいと思い、無事採用もいただきました！！ 就職も進学も絶対に自分の行きたい所、したいことができるような所に行った方がいい！後悔のない選択を！	看護と介護の共通点 ▶ 看護は「病気やケガなどの治癒や療養のサポート」 ▶ 介護は「その者が日常生活を安全かつ快適に営むためのサポート」 ※療養とは病気やケガの手当てをし、からだを休めて健康の回復を図ること ▶ 日常生活を送る上での身の回りのお世話をする点は共通。
たった1度の人生だからこそ！ ・これまでの看護師や介護支援専門員の仕事に従事し様々な人との出会いと別れを経験。 ・沢山の人の出会いの中で教えてもらったこと。人の死に関わることで自分がどう生きるかを考える機会となった。 自分のたった1度の人生だからこそ、自分が何を目標したいのかを考え、先を見据えた中でのキャリアアップが必要。	【職業準備性】 職業生活の準備性 知識・技術：専門性・適正 専門知識・専門技・業務処理能力・作業速度・持続力・正確性・クオリティ・創意工夫等 労働能力：労働の習慣・条件 ビジネスマナー・職場のルール遵守・出勤状況・報連相・指示理解や従事・安全管理等 社会生活能力：対人技能・適応能力 身だしなみ・会話・意思表示・協調性・感情コントロール・環境変化への適応等 社会生活の準備性 日常生活管理能力：基本的な生活リズム 金銭管理・生活リズムの安定・食事管理・衛生管理等 心と身体の健康管理：健康状態・病状の把握・体調管理 健康管理・体調管理・自身の特性の理解等 公立の介護福祉士養成校だからできること 北海道介護福祉学校 39
【学びの行動目標】（能動的学習） 行動目標の精度を上げて、より実行しやすくするためには、行動目標を「期日行動」と「ルーティン行動」の2つに分ける必要がある。 ・「期日行動」とは、「いつまでにやる」と期日指定の具体的行動目標 例：目標までのロードマップを作る ・「ルーティン行動」とは、「毎日繰り返しやる」行動目標 目標を達成するための能力を高める行動がルーティン行動。期日行動と違い、期限がなく即効性はない。しかし、適切なルーティン行動を設定し実行すると、目標達成に驚くほどのパワーを発揮する。	【自分を客観視】 ・「変えることができる」のは、「自分」と「自分の未来」 ・「変えることができない」のは、「他者」と「過去」 ・自分の強みは何か ・自分の課題は何か ・どのような人生を送りたいのか → そのためには何が必要か？ ・自らのキャリアを考えるために必要な資格と投資は何か？ (時間、お金、場所、関係、環境…)

実証授業として実施した①～⑨の授業概要は上記のとおりであるが、これ以外にも資料した資料があるため、それらは別紙添付とする。

（６）実証授業の振り返り：高校生の自由記載

① １年生：車いすで街に出てみようをとおして

- ・公共の場所はバリアフリーになっていると思ったが以外と少ない
- ・道路のグレーチングは車椅子のタイヤがはまりやすい
- ・出入口は狭くて車椅子では通れないところがある
- ・多少の段差や凸凹が気になる
- ・目の高さが変わってくる
- ・介護はコミュニケーションと信頼で成り立っていることがわかった
- ・福祉や介護は誰もが心地よく過ごすために必要な職業
- ・介護は誰にでも必要な知識。誰もが体験すべき
- ・相手への思いやりが大切
- ・偏見をなくすことが必要
- ・体験することで分かった。車椅子の振動が思ったよりもある
- ・「福祉の街」と謳っているが、まだまだ取り組むべき課題がある
- ・福祉や介護の知識やコミュニケーションは、高齢者や障害者だけでなく、私たちの生活にも共通している

② １年生自由記載のまとめ

- ・実体験を伴う授業により、学びの深まりや新たな気づきがある。振り返りシートからはそれぞれの生徒の視点で「知っているつもりから実際へ」と内容の深まり、関連付け、思考の変容がみられている。
- ・「福祉のまちづくり」「公共の設備」に関連する気づきの記述がある。
- ・コミュニケーションや言葉をかけること、確認することへの気づきと、意思を伝えることの大切さを理解しつつある記述がある。
- ・自分事として捉える様子がある。
- ・介護人材の必要性についての記述もある。
- ・人権、偏見、差別等に関する記述もみられる。
- ・高校生と介護学生の合同授業では、交流しながら取り組む姿も見られてきた（専門学校生がロールモデルの可能性）。
- ・体験により「一人称→二人称→三人」としての捉えの変化と、「知っているつもりから実際・実態へ」はキャリア教育の要素もある。

③ ２年生：認知症の理解、VR 体験、徘徊模擬訓練をとおして

- ・物忘れがある、細かな文字が見えない、場所がわからない、段差もみえにくい、不安に思う、認知症にはなりたくない
- ・認知症であっても、できることはある
- ・認知症でもできることはできるだけ自分で行えるように、手を出しすぎてはいけない
- ・認知症で困っている人に優しく言葉をかける
- ・認知症と診断されていても、自尊心を傷つけないように接する

- ・一人の人としてかかわりを持つ
- ・わかりやすい言葉でコミュニケーションをとる
- ・見ず知らずの人に言葉をかけるのは難しい
- ・相手を否定しない、自尊心を傷つけない。服装が変でも、いきなり指摘しないでまずは話を聞いてみる
- ・相手のペースにあわせて話をする。表情や目線、声のトーンなど様々なことに気を付けなければならない

④ 2年生自由記載のまとめ

- ・認知症という、限定された内容にはなるが、わからないことで様々なことに不安を述べる学生がいる一方で、認知症と診断されてもできることはある、持ち得る能力を使ってもらうなどの記載がある。
- ・認知症は、個人が持っているイメージや体験等により、左右されてしまうということを示している。確かな情報をいかに伝えるかが課題となる。
- ・わからないと決めつけるのではなく、わかりやすい伝え方、自尊心を傷つけないかかわり方、話を聴くという姿勢の大切さを記載する学生もいた。
- ・言語的コミュニケーションのみならず、非言語的コミュニケーションの大切さを述べる記述もある。
- ・人権、偏見、差別等に関する記述もみられる。
- ・上記のような記載から地域づくりには、確かな情報を伝え、継続した取り組みが必要であることが理會できる。

⑤介護学生へのヒアリングより

- ・半学半教を体験することで介護人材の裾野を広げるための活動など、今後実践で求められる体験ができる。
- ・何度か接点を持つことで、参加している高校生と接点が作りやすい。
- ・自分自身の進路選択の原点を振り返る機会にもなっている。
- ・自己肯定感が高まる様子がある。

⑥教職員へのヒアリングより

- ・栗山と福祉に初めて携わったので、流れや内容の繋がりが見えませんでした。体験することで理解できましたが、1年間の見通しがわかると良い。
- ・1年間たくさんのご支援ありがとうございました。この取り組みが、高校内でも生徒同士の継承ができ、積み重ねが栗山町にも伝わるようなものになるようにしていくことが重要だと思いました。
- ・福祉の勉強から社会とのつながりを意識した進路選択となるよう高校側の意識改革も必要かと思います。来年度もよろしくお願いします。
- ・来年度1年間をやってみることで全体像が完成できると思います。

- ・最初、高校内で話を聞いていると先生方の関りも希薄な感じでしたが、実際に担当して、大変よい取り組みだと思えます。より完成度をあげて生徒の自己実現の手助けになる形になればと思います。
- ・キャリア形成の学生の話、専任教員の話、どれもとても内容もあって素晴らしかったですが、一方で高校生たちのレベルにはちょっと難しいかもしれないという声もありました。
- ・そのほかは前年と類似し、生徒がいきいきと学び、さまざまな「気づき」が刺激されている様子がある。
- ・共生の視点を横断的に学べる。
- ・現段階では関与している教員に限られてしまうが、これまでとは違った関係ができつつある。
- ・双方が持つネットワークを活用できるようになってきている。
- ・学校間での備品等の貸し借りなども含め、相互の人的・物的資源を活用できる。

⑦今後の課題

- ・今年度、年度当初には予定していなかった1年生の車椅子体験から、栗山公園のバリアフリーを考えるという発表を実施したが、継続して振り返りシートの内容を高校生にフィードバックさせる方法の検討が必要。
- ・高校生の気づきによる課題（例：バリアフリー）が、一部であっても実際に改善もしくは解決されたりすれば、「町づくり」に関与しているという実感が生まれるであろう。

（６）１年次受講生に対するアンケート調査

1年次の栗山と福祉終了後、高校側の協力により参加生徒に対してアンケート調査を実施した。目的は、一年間の理解度を測ると共に、福祉や介護に対する興味・関心度を考察し、今後の高専一貫プログラム開発・実証事業に反映することを目的としている。

調査票および集計結果については、次のとおり

「栗山と福祉」 振り返りアンケート用紙（１年生）

（令和６年度）

「栗山と福祉」の一年間振り返り、以下の質問についてA、B、C、Dのいずれか一つの欄に○をつけてください。

（A：そう思う、B：どちらかというと思う、C：どちらかというと思わない、D：そう思わない）

I 福祉・介護への関心（入学時）

質 問 内 容	A	B	C	D
① 入学前から、福祉・介護に興味・関心があった。				

II 「栗山と福祉」の一年間を振り返って

質 問 内 容	A	B	C	D
① 高齢者や障害者のことについて理解できた。				
② 人を区別することなく、人を大切にすることが重要だと思った。				
③ 福祉や介護のことをもっと詳しく知りたいと思うようになった。				
④ 福祉や介護だけでなく、様々なことを知りたいと思うようになった。				
⑤ 自分の将来（進路）を考えるきっかけになった。				

III １年間での自分自身の変化

質 問 内 容	A	B	C	D
① 「栗山と福祉」の授業を受けてから、福祉や介護への関心が高まった。				
② 自分のことだけでなく、他者のことを考えるようになった。				
③ 誰もが暮らしやすい地域・生活について考えるようになった。				
④ 自分の「ふるさと」を大切にしていきたいと思うようになった。				

【自由記載】

① 1年次受講生に対するアンケート調査結果

栗山と福祉アンケート結果（2/27 集計値）

I 福祉・介護への関心（入学時）

①入学前から、福祉・介護に興味・関心があった

回答数 率

選択肢	A	そう思う	8	17%
	B	どちらかというと思う	17	36%
	C	どちらかというと思わない	13	28%
	D	そう思わない	9	19%

II 「栗山と福祉」の一年間を振り返って

①高齢者や障害者のことについて理解できた

回答数 率

選択肢	A	そう思う	27	57%
	B	どちらかというと思う	19	40%
	C	どちらかというと思わない	1	2%
	D	そう思わない	0	0%

②人を区別することなく、人を大切にすることが重要だと思った

回答数 率

選択肢	A	そう思う	40	85%
	B	どちらかというと思う	6	13%
	C	どちらかというと思わない	1	2%
	D	そう思わない		0%

③福祉や介護のことをもっと詳しく知りたいと思うようになった

回答数 率

選択肢	A	そう思う	16	34%
	B	どちらかというと思う	21	45%
	C	どちらかというと思わない	9	19%
	D	そう思わない	1	2%

④福祉や介護だけでなく、様々なことを知りたいと思うようになった

回答数 率

選択肢	A	そう思う	24	51%
	B	どちらかというと思う	18	38%
	C	どちらかというと思わない	4	9%
	D	そう思わない	1	2%

⑤ 自分の将来（進路）を考えるきっかけになった

回答数 率

選択肢	A	そう思う	17	36%
	B	どちらかというと思う	17	36%
	C	どちらかというと思わない	12	26%
	D	そう思わない	1	2%

Ⅲ 1年間での自分自身の変化

①「栗山と福祉」の授業を受けてから、福祉や介護への関心が高まった

回答数 率

選択肢	A	そう思う	24	51%
	B	どちらかというと思う	14	30%
	C	どちらかというと思わない	8	17%
	D	そう思わない	1	2%

②自分のことだけでなく、他者のことを考えるようになった

回答数 率

選択肢	A	そう思う	28	60%
	B	どちらかというと思う	18	38%
	C	どちらかというと思わない	1	2%
	D	そう思わない	0	0%

③誰もが暮らしやすい地域・生活について考えるようになった

回答数 率

選択肢	A	そう思う	25	53%
	B	どちらかというと思う	19	40%
	C	どちらかというと思わない	3	6%
	D	そう思わない	0	0%

④自分の「ふるさと」を大切にしていきたいと思うようになった

回答数 率

選択肢	A	そう思う	24	51%
	B	どちらかというと思う	21	45%
	C	どちらかというと思わない	2	4%
	D	そう思わない	0	0%

【自由記載】

- ・この一年で栗福の中で、たくさんのことを知れたり、学べることができて、入学した時よりもすごく介護の関心が高まった。
- ・二年生でも色んなことを学びたい。
- ・栗山と福祉の授業を通して、合理的な配慮のしかたを学ぶことができた。
- ・色々な立場になって考えることでどうしたら手助けできるのか、どのくらいまで手助けが必要なのかは人それぞれであることが分かった。

② 1 年次受講生に対するアンケート調査結果より

これらの高校生へのアンケート調査から次のようなことがいえる。

設問 1 の「高校入学前から福祉・介護に対する興味関心」では、①そう思う 17%、②どちらかというと思う 36%、③どちらかというとは思わない 28%、④そう思わない 19%であり、1 年間の受講を終了した結果を問う設問 3 の「栗山と福祉の授業を受けてから、福祉や介護への関心が高まった」では、①そう思う 51%、②どちらかというと思う 30%、③どちらかというとは思わない 17%、④そう思わない 2%、という結果になっている。

高校入学前の関心度は「①そう思う」②「どちらかというと思う」を合わせると半数を超える結果になっている（53%）。「③どちらかというとは思わない」「④そう思わない」が半数を下回る結果となっている（47%）。

1 年間終了後の関心の高まりの結果を見ると「①そう思う」「②どちらかというと思う」の割合が 81%になっている。これらのことから、実際に授業を受けることで生徒の意識変化に影響を与えることがわかる。

また、「自分のことだけでなく他者のことを考えるようになった」という設問に関しては「そう思う」「どちらかというと思う」で 98%となっている。同様に「誰もが暮らしやすい地域・生活について考えるようになった」という設問に関しては「そう思う」「どちらかというと思う」で 93%となっている。

「福祉や介護だけでなく、様々なことを知りたいと思うようになった」という知的好奇心への刺激に関する設問に関して、「そう思う」「どちらかというと思う」で 89%となっている。

さらには、「自分の将来（進路）を考えるきっかけになった」という設問に関して、「そう思う」「どちらかというと思う」で 72%となっている。

これらの結果から、高校生の意識・関心・動機付けに対して一定程度の効果はあると考えられる。

一方、自由記載からは、次のような記述がある。

- ・この一年の栗山と福祉の中で、たくさんを知れたり、学べることができて、入学した時よりもすごく介護の関心が高まった。
- ・二年生でも色んなことを学びたい。
- ・栗山と福祉の授業を通して、合理的な配慮のしかたを学ぶことができた。
- ・色々な立場になって考えることでどうしたら手助けできるのか、どのくらいまで手助けが必要なのかは人それぞれであることが分かった。

以上のことから、進路選択に福祉や介護が資するか否かは別としても、人が生きる上で必要なことである、自分事として捉えるという視点がみられていると思われる。そのことから、キャリア形成にも連動する可能性がある。

なお令和 5 年度の結果及び傾向は、高校入学前の関心度 43%から、1 年間終了後の関心の高まりは 84%であったが、これらの変化と同様の動きを示している。2 年間の結果ではあるが、実際に授業を受けることは高校生の意識・関心・動機付けに対して一定程度の効果はあるといえる。

（７）２年次受講生に対するアンケート調査

２年次の栗山と福祉終了後、高校側の協力により参加生徒に対してアンケート調査を実施した。目的は、この一年間の授業に関する全体的な理解度を測るとともに、福祉や介護に対する興味・関心度、今後の進路及び社会人準備性などを問い、その結果から今後の高専一貫プログラム開発・実証事業に反映することを目的としている。あわせて、高校教職員の本授業に対するコメントを自由記載方法でいただくことにした。

調査票および集計結果については、次のとおり

「栗山と福祉」（２年生）振り返りアンケート

（令和６年度）

「栗山と福祉」の二年目を振り返り、以下の質問についてA、B、C、Dのいずれか一つの欄に○をつけてください。

（A：そう思う、B：どちらかというと思う、C：どちらかというと思わない、D：そう思わない）

I 福祉・介護への関心（二年次の変化）

質 問 内 容	A	B	C	D
①二年次の「栗山と福祉」の授業を受けたことで、一年次に比較すると福祉・介護に関する興味・関心が高くなった。				

II 「栗山と福祉」の二年次を振り返って

質 問 内 容	A	B	C	D
①高齢者や障害者のことについて一年次よりも理解が深まった。				
②福祉や介護は、人の暮らしに関連していると思うようになった。				
③福祉や介護のことをもっと詳しく知りたいと思うようになった。				
④福祉や介護以外の領域のことも知りたいと思うようになった。				
⑤職業としての福祉・介護について理解が深まった。				
⑥自分の将来（進路）を具体的に考えるようになってきた。				

III 二年次の自分自身の変化

質 問 内 容	A	B	C	D
①福祉や介護の問題を自分に置き換えて考えるようになってきた。				
②これからの社会の課題を考えるようになってきた。				
③地域づくりにおける自分の役割（できること）を考えるようになった。				

【自由記載】

① 2年次受講生に対するアンケート調査結果

栗山と福祉アンケート結果（2/27 集計値）

I 福祉・介護への関心（二年次の変化）

① 二年次の「栗山と福祉」の授業を受けたことで、一年次に比較すると福祉・介護に関する興味・関心が高くなった

回答数 率

選択肢	A	そう思う	18	40%
	B	どちらかというと思う	21	47%
	C	どちらかというと思わない	2	4%
	D	そう思わない	4	9%

II 「栗山と福祉」の二年次を振り返って

① 高齢者や障害者のことについて一年次よりも理解が深まった

回答数 率

選択肢	A	そう思う	29	64%
	B	どちらかというと思う	14	31%
	C	どちらかというと思わない	1	2%
	D	そう思わない	1	2%

② 福祉や介護は、人の暮らしに関連していると思うようになった。

回答数 率

選択肢	A	そう思う	31	69%
	B	どちらかというと思う	11	24%
	C	どちらかというと思わない	2	4%
	D	そう思わない	1	2%

③ 福祉や介護のことをもっと詳しく知りたいと思うようになった。

回答数 率

選択肢	A	そう思う	18	40%
	B	どちらかというと思う	16	36%
	C	どちらかというと思わない	8	18%
	D	そう思わない	3	7%

④ 福祉や介護以外の領域のことも知りたいと思うようになった。

回答数 率

選択肢	A	そう思う	21	47%
	B	どちらかというと思う	16	36%
	C	どちらかというと思わない	5	11%
	D	そう思わない	3	7%

⑤ 職業としての福祉・介護について理解が深まった。			回答数	率
選択肢	A	そう思う	26	58%
	B	どちらかというと思う	14	31%
	C	どちらかというと思わない	2	4%
	D	そう思わない	3	7%

⑥ 自分の将来（進路）を具体的に考えるようになってきた。			回答数	率
選択肢	A	そう思う	25	56%
	B	どちらかというと思う	14	31%
	C	どちらかというと思わない	2	4%
	D	そう思わない	2	4%

※2名未回答

Ⅲ 二年次の自分自身の変化

① 福祉や介護の問題を自分に置き換えて考えるようになってきた。			回答数	率
選択肢	A	そう思う	23	51%
	B	どちらかというと思う	15	33%
	C	どちらかというと思わない	4	9%
	D	そう思わない	3	7%

② これからの社会の課題を考えるようになってきた。			回答数	率
選択肢	A	そう思う	22	49%
	B	どちらかというと思う	19	42%
	C	どちらかというと思わない	1	2%
	D	そう思わない	3	7%

③ 地域づくりにおける自分の役割（できること）を考えるようになった。			回答数	率
選択肢	A	そう思う	21	47%
	B	どちらかというと思う	15	33%
	C	どちらかというと思わない	6	13%
	D	そう思わない	3	7%

【自由記載】

- ・看護師になりたいと思っているがそれ以外でも興味深く、医療職について学びが深まった。
- ・とても良かった。わかった。福祉や将来の考え方を学ぶことができた。
- ・子どもに関わる仕事につきたい。障がいの子の話が役に立った。
- ・介護についてよく考えることができた。社会との関連づけて考えることができた。
- ・国家試験に向けて様々な方法で取り組んでいてすごい。フィンランド行ってみたい。

② 2年次受講生に対するアンケート調査結果より

2年次のアンケートの目的は、一年間の授業に関する全体的な理解度を測るとともに、福祉や介護に対する興味・関心度、今後の進路及び社会人準備性などを問うというものである。結果については、次のとおり

設問Ⅰ-1は「1年次と比較しての福祉・介護に関する興味・関心」である。①そう思う 40%、②どちらかというと思う 47%、③どちらかというとは思わない 4%、④そう思わない 9%となっている。①および②を合わせると、87%の高校生がより興味・関心が高くなったと答えている。

設問Ⅱ-1は「理解の深まり」である。①そう思う 64%、②どちらかというと思う 31%、③どちらかというとは思わない 2%、④そうは思わない 2%である。①および②を合わせると 95%の高校生が理解の深まりを感じている結果であった。

設問Ⅱ-2は「福祉や介護は人の暮らしに関連している」という問いであるが、これらも①そう思う 69%、②どちらかというと思う 24%、③どちらかというとは思わない 4%、④そうは思わない 2%である。①と②を合わせると 93%が取り組んできた内容は、人の暮らしに関連していることを理解したということになる。

設問Ⅱ-3・4は、「もっと知りたい」という知的好奇心への関連を問うものとしている。設問3はテーマとして学んでいる「福祉・介護」のことであり、設問4はそれ以外の領域のことである。設問3の結果は①および②を合わせた割合が76%にとどまった結果に対し、設問4の他領域は83%になっている。この結果から、一つのことを系統的に学ぶこと、自分の知らなかった領域を学び体験することが、関連付けた考察やその後の取り組みへの意欲や動機付けになることがわかる。

職業としての福祉・介護を理解する問いである設問Ⅱ-5は、①そう思う 58%、②どちらかというと思う 31%で、計 89%が職業としての福祉・介護の理解が深まったと回答している。このことから、高校生が将来の進路・職業として福祉・介護の領域を選択しない結果になったとしても、長期的視点で見れば福祉・介護に関する理解や裾野を広げる要素を持っていると期待できるものである。

設問Ⅱ-6「将来や進路選択に関する具体的思考である。①そう思う 56%、②どちらかというと思う 31%で、計 87%が徐々に自らの進路選択の検討に資すると感じている結果である。また、設問Ⅲ-1「自分の問題に置き換えて考察する」、設問Ⅲ-2「社会課題への関心」、設問Ⅲ-3「自分の役割、地域づくりへの関与」も 80%～91%の結果となっている。このことから、進路・職業選択、社会人準備性、地域における当事者としての意識の高まりとみることもできる。

なお自由記載からは、次のような記述がある。

・将来、看護師になりたいと思っている。看護師だけでなくそのあともすごく興味深く、医療職への学びが深まった。

・とても良かった。

・子どもにかかわる仕事につきたいと思い、障がいの子の話が役立った。

・わかった。

- ・国家試験に向けて個人個人が様々な方法で取り組んでいてすごいと思った。
- ・自分もフィンランドに行ってみたい。
- ・福祉や将来の考え方を学ぶことができた。

などの記載があった。

少子高齢・人口減少社会における目指すべき方向性の一つである共生社会を考えると、このような高校生の意識変化、進路・職業選択、社会人準備性等にも影響を与える福祉・介護を切り口としたプログラムは有用性があるといえる。

令和7年度は、すべての学年を対象にしたプログラムを展開することになる。そこでの調査結果がどのようになるか期待しているところである。

（８）アンケート結果に基づく考察

本アンケートは令和5年度に引き続き実施し、1年間の経過を振り返った結果である。1年次の調査は前年と同内容、2年次は1年次の学習を踏まえてさらなる意識変化、進路・職業選択、社会人準備性を問う形で実施した。

このアンケート結果と、高校生がテーマごとに作成した振り返りシート等をどのように活用するか、また、本年度は急遽試行的に2時間追加で実施した「車椅子体験に基づく、栗山公園のバリアフリーについて」など学内外における発表など、その後の取り組みが今後の課題の一つである。また、決まっていることを教える・伝えるだけではなく、物事や事象に対して関連付けて考察する、理解を深める、体験する、伝えてみるなどの、インプットとアウトプットをどのように実施すべきか、ということもある。

それらのことからいくつかを挙げれば、

- ・高校生・介護学生の気づきの活用
- ・振り返りシートのフィードバック方法の検討
- ・気づきによる課題（例：バリアフリー）の整理、その後の展開への取り組み
- ・半学半教体験
- ・肯定的考察と否定的考察、演繹法または帰納法に基づく理解

などがある。一部であったとしても実際に改善・解決されたりすれば、「町づくり」に関与しているという実感が生まれる。

このようなことを意識したうえで次年度以降の実証授業に取り組む必要性がある。

3 高校教員との関係性の変化

本事業に取り組んだ令和4年度は準備・企画が主たるものとなり、意識して情報交換等を実施してきた。令和5年度はそれぞれの担当教員が随時打合せ、調整を行うようになり関係性が良好な状況となっている。また、双方の人的物的な社会資源を有効活用する例に結びついたものもあった。それらの例を挙げれば、高校体育の授業にアダプテッドスポーツが取り入れられるなど、この「栗山と福祉」に限らず横断的な取り組みと、本事業には直接的に該当しない授業であっても、相互に授業見学するなどの新たな展開もみられた。

令和6年度は、高校の1・2学年が対象となり、介護福祉学校教職員が対応する時間も増えたが高校内で学年通信やホームルームなどで学生が発表するなど、内容をより深めるようになってきている。また、高校の教員から、評価・反省・次年度に向けて（より内容を充実させるために）と、意見がもらえるようになってきている、他科目との連動（例、視覚障害体験のために、家庭科でアイマスクを作成する等）が意識されつつあるという側面もみられている。ただし、細部にまで目を向けると高校の教職員の人事異動もあり、本事業に関するコンセンサスをどのように得るかという、実証事業開始前後に課題となったこともみられた部分がある。年度当初には意見交換、打合せを実施したが、途中での反省を踏まえ今後は定期的な情報交換、打合せが必要となる。

4 本事業の取り組みの課題

本年度、1・2年生への実証授業を実施しながら随時カリキュラムに修正をかけ、令和7年度以降を見据えての3年生の令和7年度分及び令和8年度分のカリキュラムを修正した。

実証授業の評価・修正を年度ごとに実施していることから、令和7年度で一度、実証授業は全体で実施することになる。しかし、既に内容を変更しているものもあることから、令和8年度が3年間を見通したカリキュラムの完成となる。一方、社会情勢の変化、福祉・介護現場のICT化、LIFE（Long-term care Information system For Evidence）などのデジタル活用、福祉・介護現場の生産性向上、SDGsも含め、今後も変化が予想できることから、時代の情勢を踏まえつつ内容の検討・調整・変更が必要になることを理解しておかなければならない。そのための、情報収集、連絡調整、高校・介護福祉学校・関係者等によるコンセンサス理解のための意見交換、定期的な打合せ会議の実施が求められる。

次年度は、3学年を通しての実証授業の展開になることから、全体調整、個別調整、学年ごとの打合せが必須になる。また、担当者だけでこれらの事業に関わるのではなく、本事業を実施するうえでの負担感の軽減と新たな協力者を求めるなど、地域人材を養成するためのすそ野の拡大を目指すことも必要となろう。

本町及び介護福祉学校は「介護人材確保に関する自治体包括連携協定」を北海道内で進めている（本年度末で20自治体と協定締結）。それらに関しても、本事業の活用の可能性を探る必要があることから、高専一貫による垂直的展開のある有機的連携による教育に加え、まずは段階的に「自治体包括連携協定」先にこの取り組みに関する情報発信、取り組み内容のオープンソース化、再現可能性の検証などを行い水平展開も行うことが必要と考えている。

（1）事業の内容と実施に関して

①アウトライン・スキームの確認と共有

- ・高校・関係団体等と本事業の目的・全体像、内容等に関する確認・調整
- ・管理職・担当者との関係づくり
- ・新たな協力者の確保

- ・地域の実態把握と、課題解決方法 に関する 学習についての検討
- ・社会情勢の変化、福祉・介護現場の業務内容の変化等に関する情報収集
- ・専門職の給与条件、キャリアアップ等に関する高校教員等との情報共有
- ・課題の共有。令和7年度は「栗山と福祉」を全学年で展開
- ・（高校内での）縦系列による展開と他科目・学校行事等との連動
- ・小中高専の連携による、一貫した福祉教育との連動
- ・高校・介護学校双方による情報発信、すそ野拡大のための展開

②実施に向けた調整

- ・学校行事計画とのすり合わせ、相互理解の促進
- ・高校側と実施時期、内容等に関する調整が随時必要
- ・合同授業における学校行事・授業展開等を考慮しての実施
- ・授業時間の調整（高校は1コマ50分、養成校は1コマ90分）
- ・カリキュラム変更への対応

③教職員のサポート

- ・教職員の負担感の軽減
- ・人事異動（担任・担当教員、進路指導部）を視野に入れる

④実証授業の普遍化への取組み

- ・実証授業、合同授業等の内容を他校・他地域でも再現できるよう、準備の方法、時間配分、必要物品、実施手順、配慮する内容などを整理し、参考資料として小冊子を作成
- ・小冊子の配布状況と活用状況の確認

⑤専修学校の立ち位置形成

- ・事業実施による、情報の集約点と発信点機能の明確化
- ・福祉・介護の視点からのキャリア形成教育への連動性
- ・専門職養成教育内容との連動性
- ・社会情勢変化における地域づくりへの関与の視点
- ・地域の中で活躍する人材養成への関与

（２）高校生・介護学生がともに感じるワクワク感

- ・高校生、介護学生との合同授業の継続実施
- ・専門職のキャリアアップ方法、就労状況等に関する学び
- ・福祉・介護専門職（若手）も交えた演習機会の創出
- ・介護学生や若手専門職をロールモデルに
- ・介護学生は半学半教の経験
- ・介護職員初任者研修や、国家資格取得への動機づけ
- ・福祉・介護と関連する領域との調整

（３）垂直展開と水平展開に向けた整理

- ・自治体包括連携協定等を軸にした水平展開
- ・取り組み事例集の作成と配布
- ・北海道教育委員会、福祉担当部局からの協力・助言
- ・高等学校家庭科教員（部会）、福祉科を有する高校への情報提供
- ・編入可能大学等との連携
- ・関連資格に関する情報収集など

５ まとめ

令和５年度に開発した高専一貫プログラムの実証授業を実施した。当初、カリキュラムに基づき展開したが、実施・検証→修正→企画調整→実施・内容修正といったPDCAを意識した取組を展開してきた。本事業は、３年間を見据えたプログラムであることから、実施するのと同時、より内容の高いカリキュラムへと計画作成当時のカリキュラムの修正も随時、実施することができた。そのことから、今後も同様の取り組みを実施することにしたい。しかし、社会情勢の変化、人口の構造的変化、地域における差異、業界内外のDX化、資産性向上、GIGAスクールなど、様々な情報を収集しながら対応することが必要である。そのことから、PDCAサイクルに基づく展開だけではなく、RV-PCDSSSという視点も必要になる。

受講した高校生の福祉・介護に対する意識の変化、動機付け、社会人準備性、知的好奇心への影響なども把握するため、継続して意識調査を実施し、学習による経年変化を調査するとともに、３年次では総合的な評価を行うことにしたい。

本校は「地域活動研究」「キャリア形成支援講座」を学校設定の独自科目として栗山町をフィールドとした社会資源の活用も含めた教育活動を行っている。本年度、高校生もそれらの授業に参加し実証授業として実施した。そのことから、本事業の目的である「地域の中核的人材育成」をより意識して展開することが求められる。介護学生が高校生のロールモデルになりえることから、今後は高校生が中学生へのロールモデルになることも期待している。介護学生が半学半教（学ぶ立場でありながら、教える立場も経験）の機会になりえるとなれば、すぐにではなくても高校生にもそれらの期待が生じてくるだろう。単に「栗山と福祉」の授業展開に終始するのではなく、キャリア形成に関連付けする方法、具体的な進路選択・職業選択を模索することも課題として残されている。

高校・専門学校の連携と一貫したプログラムを軸に、本町まちづくりの主要拠点である「北海道介護福祉学校」が核となり、福祉・介護の視点を活かした教育から地域における将来の介護人材の発掘育成を図り、介護人材が定着する環境づくりまでも貢献することで学校の存在価値を発揮、地域ニーズに呼応する学校へ深化しなければならないことも明確になっている。

本事業で開発する地域での介護人材養成に向けたキャリア形成プログラムの実践により、介護人材不足の解決はもとより、福祉教育を通して身に付けることができる豊かな人間性を育む人材養成を行い、社会情勢、人口構造が変化する社会、ま

た、差異がますます生じる地域において中核的に活躍できる人材の輩出を実現できることを目標に、今後も高専接続カリキュラム開発と検証・改善を行うことが求められると考察できる。

< 成果報告書 >

本報告書は、文部科学省の教育政策推進事業委託費による委託事業として、北海道栗山町が実施した令和6年度「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」の成果をとりまとめたものです。